

館山市稲村城跡調査報告書



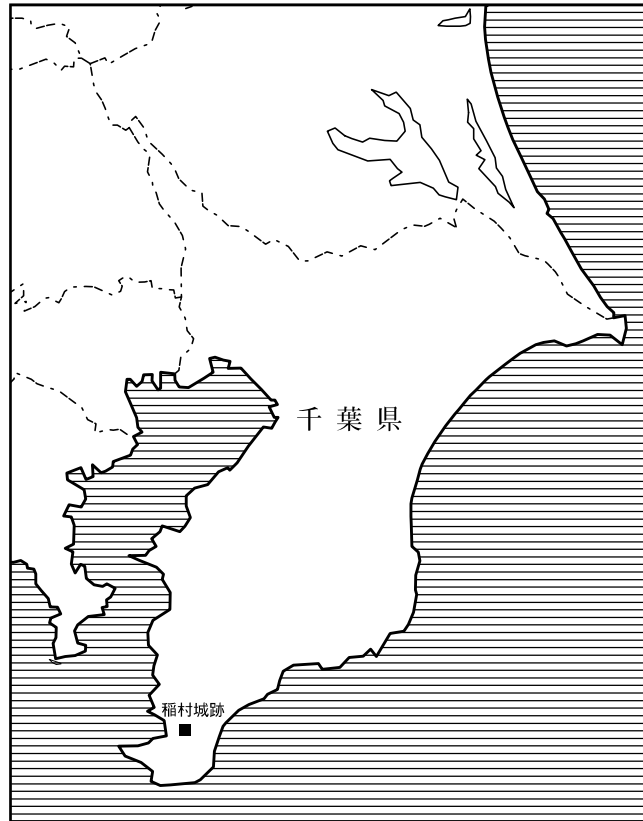
館山市稲村城跡調査報告書

発行日／平成20年3月25日
編集・発行／館山市教育委員会
千葉県館山市北条1145-1
印刷／有限会社クォーク

2008

館山市教育委員会

たて やま し いな むら じょう せき
館山市稲村城跡調査報告書



序

館山市内には、戦国大名里見氏にかかわる史跡や社寺が所在し、それらにまつわるさまざまな史実や伝説が伝えられています。里見氏は館山市民の歴史的な誇りであり、館山市・館山市教育委員会は、里見氏の歴史遺産を活用したまちづくりに取り組んでまいりました。

里見氏最後の居城である館山城跡に、昭和57・58年度、館山市立博物館の本・分館を開館し、戦国大名里見氏の歴史と、里見氏を題材に書かれた『南総里見八犬伝』をメインテーマに博物館活動を展開し、まちづくりの基礎ともなる資料や情報の提供に努めてきたところです。

また平成11年度には、史実に基づく里見氏の足跡を理解できるように、市民読本「さとみ物語」を作成し、戦国大名里見氏をメインテーマとする館山市立博物館の教育普及活動などの活用により、里見氏に対する理解を深める機会の充実に努めております。

里見氏の城跡である稲村城跡は、千葉県教育委員会が昭和58年度に実施した確認調査と測量調査により、高度な城普請がなされていたこと。また、それまで知られていた以上に大規模な城であることが判明し、中心となる主郭部の構造等が明らかにされました。

その後、平成8年以降、開発行為と遺跡保存との調整なかで、稲村城跡への関心が高まり、文献史料を中心とする里見氏研究が急速に進展しました。その結果、稲村城跡を舞台におこった天文の内乱（内訌）が里見氏の歴史の分岐点となり、ここで滅亡した義実から義豊に至る嫡流の系統を前期里見氏、以後里見氏を発展させた義堯の系統が後期里見氏とされるようになりました。さらに、前期里見氏の当主が拠った稲村城の存在意義が、里見氏の歴史にとって、重要であったことが明らかにされたのです。

こうした遺跡の重要性から、稲村城跡の保存と活用を図るための基礎資料を得るために、平成18・19年度の2ヵ年事業により、国庫及び県費の補助を受けて、測量調査及び発掘調査等を実施しました。その結果、中郭部においても高度な城普請がなされていることが判明し、昭和58年度の千葉県教育委員会による発掘成果を補強する成果を得ることができました。

このたび、その調査成果がまとまり、報告書を刊行する運びとなりました。本書が学術資料として活用されることはもとより、稲村城跡の保存と活用のため、市民の皆様方に積極的に利用されることを切望いたします。

最後になりますが、本事業の実施にあたりまして、土地所有者、地元関係者の皆様方をはじめ、文化庁、千葉県教育委員会、稲村城跡調査検討委員会、調査を担当された調査員の方々から、多大なる御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成20年3月25日

館山市教育委員会
教育長 石井 達郎

凡 例

1. 本書は、館山市稲所在の稲村城跡確認調査事業の調査概要報告書である。
2. 本事業は、館山市が平成18・19年度の2ヵ年、国庫補助（平成18年度事業費3,000,000円、同19年度4,000,000万円、補助率各年50%）及び県費補助（補助率各年12.5%）を受けて、実施したものである。
3. 本事業を円滑に進めるため、館山市稲村城跡調査検討委員会を組織し、同委員会の指導と助言のもとに、館山市教育委員会が調査を実施した。

稲村城跡調査検討委員会

委員長 河原純之 〔元文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官〕
副委員長 梶山林繼（國學院大学神道文化学部教授）
委員 愛沢伸雄 〔NPO法人南房総文化財・戦跡保存活用フォーラム理事長〕
委員 天野 努（館山市文化財審議会委員）
委員 石井達郎（館山市教育委員会教育長）
委員 滝川恒昭（千葉県立船橋高等学校教諭）
委員 脇田安保（稲共有地代表者）

館山市教育委員会事務局

次 長 忍足光正
生涯学習課課長 田中 豊
同 主 幹 永井茂樹
同博物館主任学芸員 岡田晃司
同 主 査 杉江 敬
同 主任主事 青木俊久

4. 地形測量調査を、平成18・19年度の2ヵ年、調査検討委員会の指導・助言のもとに有限会社安房測量に委託し実施した。
5. 発掘調査を、調査検討委員会の指導・助言のもとに、平成19年11月26日～12月21日に行い、青木俊久（主担当）・杉江敬（副担当）が実施した。整理作業は、平成20年1月7日～2月22日に実施し、青木俊久が担当した。
6. 縄張図作成調査は、遠山成一氏（千葉城郭研究会）が実施した。また、稲村城跡周辺の歴史資料等調査は、天野努氏・滝川恒昭氏（館山市稲村城跡調査検討委員会委員）、石崎和夫氏・早川正司氏（安房地域文化史研究会）、柴田龍司氏（千葉城郭研究会）、岡田晃司・杉江敬・青木俊久が実施した。御協力いただいた調査員の皆様方に、記して、深く謝意を表します。
7. 本書は、館山市稲村城跡調査検討委員会・館山市教育委員会事務局が分担して執筆した。なお、稲村城跡の遺構については遠山成一氏、中世石造文化財については早川正司氏からご報告をいただいた。御協力いただいた執筆者の皆様方に、記して、深く謝意を表します。
8. 調査の実施にあたっては、発掘調査地土地所有者の正木せき氏、稲村城跡土地所有者の皆様方、並びに稲区の皆様方、玉龍院・貴船神社・愛宕神社・西柵堂・稲村院・木幡神社・三善寺の関係者各位、石井春夫氏、三浦一雄氏、大野邦男氏、押足洋氏の御協力があった。記して、深く謝意を表します。
9. 調査の実施及び本書をまとめるにあたり、多くの方々及び機関・団体に、ご指導・ご協力をいただいた。記して、深く謝意を表します（順不同）。
石井進氏、景山春枝氏、正木和幸氏、三坂勝哉、安田隆一氏、山口秀雄氏、脇田安保氏、杉山奈津子氏、稲区、安房地域文化史研究会、千葉城郭研究会、千葉県教育庁教育振興部文化財課

本文目次

I	はじめに	
1	調査に到る経緯（杉江敬）	7
2	稲村城跡の位置と地理的環境（杉江敬）	8
3	稲村城跡の遺構について（遠山成一）	9
II	稲村城跡と歴史的環境	
1	前期里見氏と稲村城（滝川恒昭）	12
2	稲村城跡周辺の歴史的環境（杉江敬）	14
3	関連資料と周辺情報	
	(1) 文献資料（岡田晃司）	16
	(2) 中世石造文化財（早川正司）	18
	(3) 中世の仏像彫刻（岡田晃司）	22
	(4) 中世に関する伝承（岡田晃司）	24
III	発掘調査とその概要	
1	調査経過（青木俊久）	27
2	調査区の概要（青木俊久）	29
IV	まとめ（天野努）	37
	報告書抄録	巻末

表目次

- 第1表 稲村城跡周辺の中世仏
- 第2表 館山市海岸部の中世仏
- 第3表 石器属性表

挿図目次

- 第1図 稲村城跡周辺の主な古代・中世の遺跡
- 第2図 関連資料の分布1（稲村城跡周辺）
- 第3図 関連資料の分布2（稲地区）
- 第4図 トレンチ配置図
- 第5図 A地点平面図・土層断面図
- 第6図 B地点平面図・土層断面図
- 第7図 C地点平面図・土層断面図
- 第8図 C地点出土遺物
- 第9図 調査地縄張図
- 付図1 稲村城跡主郭部及び中郭部縄張図
- 付図2 稲村城跡主郭部地形測量図

写真目次

- 図版1 稲村城跡全景航空写真
- 図版2 トレンチ1完掘状況 トレンチ2完掘状況 西壁土層断面
- 図版3 トレンチ2南側岩盤検出状況 トレンチ3完掘状況 SD1検出状況
- 図版4 トレンチ3拡張部SD1 北壁土層断面 トレンチ4完掘状況
- 図版5 トレンチ4北側西壁土層断面 SI1 検出状況 トレンチ5完掘状況
- 図版6 トレンチ6完掘状況 南壁土層断面 調査作業風景
- 図版7 縄文土器(1) 縄文土器(2) 出土石器 弥生土器 古墳時代土師器 近世陶磁器
- 図版8 中世石造文化財 1.延命寺開山塔 2.天文銘石仏 3.光堂法篋印塔群 4.福生寺五輪塔

I はじめに

1. 今回の調査に至る経緯

稲村城跡の発掘調査は、千葉県教育委員会が国庫補助を受け、県内の中世城館跡のうち重要性が高くかつ開発等の影響を受ける恐れがあるものを対象として行った「千葉県中近世城跡確認調査」事業の一環として、昭和58(1983)年に実施された。確認調査と測量調査の結果、高度な城普請がなされていたこと。また、それまで知られていた以上に大規模な城であることが判明し、中心となる主郭部の構造等が詳細に把握されたなどの成果があった。

その後、千葉県企業庁が稲村城跡の南東部で館山工業団地の整備を計画し、その進入道路として稲村城跡を通る館山市道8042号線の建設が予定され、平成4(1992)年、館山市議会において市道8042号線認定の議決がなされた。

平成8年、市道8042号線の建設計画に伴う稲村城跡保存運動が展開され、「房総里見氏と稲村城跡をみつめるフィールドワークと講演のつどい」、展示会「わたしたちの稲村城跡大発見フェア」の開催、資料集「里見氏稲村城跡をみつめて」の刊行など、数々の市民活動が行われた。

翌平成9年12月の館山市議会で、「稲村城跡保存に関する請願書」が採択され、その後、稲村城跡の主郭部を通る館山市道8042号線の計画は変更された。その結果、平成11年度に城跡東縁部の丘陵上で、市道8042号線の建設を前提とした確認調査を、(財)総南文化財センターが実施したが、その結果、時期を特定できる遺構及び遺物の検出はみられなかった。

稲村城跡の保存運動の展開に伴い、里見氏への関心が高まり、文献史料を中心とする研究が急速に進展した。その結果、房総里見氏の歴史は、稲村城を主たる舞台にして起こった天文2～3(1533～1534)年の内乱によって大きく二分されること。里見氏の歴史の分岐点となったこの乱を天文の内乱(内訌)とよび、ここで滅亡した義実から義豊に至る嫡流の系統を前期里見氏、以後里見氏を発展させた義堯の系統を後期里見氏とすること。前期里見氏が本城とし、ともに滅亡したのが稲村城だったことなどが判明した。つまり、稲村城の存在意義が、前期里見氏の歴史にとって、極めて大きかったことが明らかにされたのである。

こうした遺跡の重要性に鑑み、今後の稲村城跡の保存活用について、文化庁・千葉県教育委員会・館山市教育委員会の三者で協議を重ねた。その結果、平成18・19年度の2ヵ年事業により、館山市教育委員会が国庫及びの県費の補助を受けて、測量調査及び発掘調査等を実施する運びとなった。

事業の実施にあたっては、まず地権者及び地元の稲区民への説明を行い、御理解をいただいた上で、今後の遺跡の保存・活用も視野に入れた稲村城跡調査検討委員会を組織した。平成19年度の発掘調査にあたっては、館山市教育委員会が直営で実施することとなった。以下、地元説明会の実施状況と稲村城跡調査検討委員会会議要旨を記す。

【地元説明会実施状況】

- ① 稲区第1回説明会：平成18年1月8日(日) 稲区集会所

- ② 地権者説明会：平成18年7月30日（日） 稲区集会所
- ③ 稲区第2回説明会：平成18年8月30日（水） 稲区集会所
- ④ 発掘調査現地説明会：平成19年12月19日（水） 発掘調査地点

【調査検討委員会会議要旨】

- ① 第1回委員会：平成18年12月13日（水） 館山市役所
 - ・ 稲村城跡調査方針（案）について
 - ・ 平成18・19年度年次計画（案）について
- ② 第2回委員会：平成19年3月16日（金） 館山市役所
 - ・ 稲村城跡主郭部等測量調査成果物の作成について
 - ・ 平成19年度調査計画（案）について
- ③ 第3回委員会：平成19年7月27日（金） 館山市役所
 - ・ 平成19年度 稲村城跡確認調査事業計画について
- ④ 第4回委員会：平成19年12月7日（金） 稲村城跡・館山市役所
 - ・ 発掘調査の実施状況について
 - ・ 調査報告書の構成について
- ⑤ 第5回委員会：平成20年3月26日（水） 館山市役所
 - ・ 調査報告書の刊行について
 - ・ 平成20年度以降の事業実施計画等について

(杉江 敬)

2. 稲村城跡の位置と地理的環境

千葉県館山市を中心とする房総半島南部の地形は、北から嶺岡丘陵、館山平野、安房丘陵に大別することができる。水系は谷床部にある地溝帯に沿って中小河川がわかれ、城跡周辺では、館山平野を流れ館山湾に注ぐ、平久里川、山名川・滝川が主な河川となる。

稲村城跡（第1図1）は館山市稲にあり、JR内房線九重駅の西方約600mの丘陵上に所在し、安房丘陵が北側の館山平野に向かって樹枝状に伸びた北端部に位置する。城跡北端にある主郭部は「城山」と呼ばれ、その最高部の標高は約64mである。「一の坪」など、条里跡の関連地名が残る東側の水田面との比高は約45mである。

稲村城跡は、この城山から南側約200mのところ、四方に樹枝状に広がる丘陵一帯に構築されているが、主郭部からは館山湾（鏡ヶ浦）に注ぐ平久里川や、その支流である山名川・滝川などが形成した館山平野を一望できる。安房国府推定地である南房総市府中や滝田城跡を臨め、また尾根伝いに南方の白浜城跡と通じるなど、稲村城跡は、安房国の中枢部を掌握するための絶好の地に所在するといえる。

北麓には、滝川が自然の城濠となって流れ、滝川との間に国道128号線・JR内房線が通る。現在は西側約4.1kmの位置にある海岸線が、当時はもっと内陸部にあったと推測されているため、滝川の水運を利用できたものと考えられている。

(杉江 敬)

3. 稲村城跡の遺構について

稲村城跡の遺構を考えるにあたっては、主郭部とそれを鶴翼状に取り巻く細尾根に散在する曲輪状遺構を、どのように判断するかが大きな問題となる。現状では、主郭部と「中核部」および「外郭部」と判断されているが、踏査にもとづく縄張図(付図1)作成によって、考察を試みたい。なお、縄張図作成は歩測とコンパスによるものであり、『千葉県中近世城跡研究調査報告書第4集 - 稲村城跡・臼井城跡発掘調査報告 - 』（以下「報告書」と略す）記載の「稲村城跡主要部概念図」および今回の発掘・測量調査の結果を基にしたことを明記しておく。

(1) 主郭部

主郭部については、前述の「報告書」により、大々的な土盛による土木工事が施されていたことが判明している（千葉県教育委員会 1983）。当該報告書に付された測量図にもとづいて、「水往来」近辺の周辺部も含めた縄張図が既に作成されている（遠山成一 1996）。

主郭部の虎口（出入り口）は、明確な平坦面をとまなわれないが、現状では主郭部より一段低く内柵形状をしている。虎口を見下ろす位置に、主郭南端の小祠の鎮座する櫓台が張り出し、防御を施している。将来的には、この部分の全面発掘により、虎口の形状が詳細に把握されることが望まれる。

主郭より東方に延びる尾根側に堀切と土塁をもち、急崖となる北方・西方には土塁をとまなっていない。おそらく往時よりそうであったと考えられる。その理由は、鉄砲伝来以前の天文初期に盛期をもつ本城は、主郭北方および西方が急斜面であり、低地からの比高差も40mあって弓矢による攻撃をうける心配はなかったことによる。そのため、こちらには土塁は不要であったと考えられる。

それに比べ、万一主郭東方の尾根に取りつかれてしまうと、こちらからの攻撃をまともに受けてしまうため、堀切を穿ち、さらに地山削りだしにより土塁を築いたと考えられる。同様に、南方の「水往来」方面から北方に延びる尾根に対しても、堀切を穿つとともに前述の櫓台を築き、虎口とともにこちらに向かっても防御を敷いている。

主郭西側には幅3m、長さ50m余りの細長い腰曲輪（帯曲輪）を設けているが、これは斜面をより急峻に削り落とし、切岸にした結果と考えられる。この北側先端からは、主郭の北側斜面を斜めに東側に降り、途中で西方へスイッチバックするように降る道が認められる。最後には「西門」の踏切近くに降りてくることができ、戦後しばらくまではこの道を使って主郭部まで上り下りしていたことが古写真や、地元住民よりの聞き取りで確認できる。往時の登城路の一つとして考えてもよいであろう。

ところで、主郭東方の堀切に接する土塁の手前には、現在、坂虎口のように堀切部や東尾根に達する通路が口を開けている。これは本城が機能していたころからのものであろうか。もし、そうであれば搦め手といえる。表面観察によれば、単なる崩落とも見えず虎口のようにも思える。最終的な判断は将来的な発掘の結果を待ちたい。

(2) 主郭部周辺

「水往来」から主郭部に向かい、ほぼ北方向に尾根(4)一尾根に付した括弧つき番号は前記「報告書」に準ずる、以下同じ一が延びる。途中、東方向に向かい支尾根(3)が延びる。これと後述の支尾根(2)によって囲まれた南東部に開口する空間こそは、主郭の南東部直下に位置し、居館推定地の一つとして有力と考えられる。

主郭南端まで延びた尾根は、主郭と堀切で断ち切れ、主郭への敵の侵入を防いでいるが、堀切部手前を左に折れ主郭虎口へ向かう角部には、敵の侵入を難しくする工夫が施されている。高さ1mほどの張り出しを設け、通路を狭くしているのである。

堀切を隔て主郭の東北東方向へ延びる尾根(1)は、ほぼ自然地形で90mほど続き、その先は削り残しの土橋をともなう堀をもつ。土橋より東方向には、一段低く平坦な面が途中で段差をともないながら、さらに90mほど延びている。尾根先端部は垂直に断ちきられ、取りつくことを不可能にしている。

また、尾根先端の南側斜面は100m以上にわたって切岸状に削り落とされ、幅5m前後の腰曲輪が段差をともないながら続いている。斜面から尾根上への敵の取りつきを困難にするために造作されたものとみて間違いない。この腰曲輪の西端にあたる、前述の土橋をともなう堀の直下には、規模は小さいながらも垂直切岸をもつ掘り込みが存在する。これは他の里見氏・正木氏の城郭にもいくつか見受けられるものに類似するが、ここでの意図は不明である。

尾根(1)からは南東方向に尾根(2)が派生している。尾根(2)の上面は自然地形となるが、先端は垂直に削り落とされている。また、尾根(1)から同(2)の派生する付け根部分は、谷頭が垂直に削り落とされ、二段から三段の腰曲輪が設けられ、尾根上面への取りつきを不可能としている。尾根(2)と同(3)によって作り出された空間の内側もまた、腰曲輪状の平場をともなっている。これらはいずれも城郭遺構と見なして大過ないであろう。

尾根(3)の南側となる尾根(4)東部斜面に、現状では段々畑として使用されている腰曲輪状遺構が数段存在している。しかし、段差が小さいこともあり、これを城郭遺構として積極的に認めることは難しいかと思われる。

主郭部西方に延びる尾根(5)も先端部を三方削り落として、取りつきを困難にしている。また、これより以南、「水往来」まで山裾部を削り落とし、切岸状にしている。

(3) 中郭部

今回発掘調査の結果、「水往来」南の三段にわたる平場は、ある時期に削平されて造成されたことがわかった。また、これらの斜面は切岸状に整形されており、城郭に関わる造作として認めてよいものと思われる。

中郭部から南南東方面に熊手状に延びる4本の尾根は、上面は堀切などの遺構はまったくなく、ほぼ自然地形と見られる。ただし、今回発掘を受けた場所の南に延びる尾根には、先端に向かって段整形した痕跡がある。また、東端部に位置する尾根は先端を削り落とし、腰曲輪状に平場を配しており、一見すると城郭遺構のように見える改変が存在する。

このように、「水往来」南側の平坦部や尾根にも、地形の人工的改変を見いだすことができ、広い意味での城域に含めてよいものと思われる。

(4) 外郭部

主郭部のある尾根と支谷をはさんで西に位置する、北西方向に延びる尾根にも、腰曲輪状の数段にわたる削平面が存在する。「水往来」より中郭部への分岐点から、南西方向250mの位置に、標高60.2mの尾根のピークがある。中郭部より西方向へ延びる小道がこのピークに突き当たるが、字芋洗の谷部に向かいピーク西側斜面に腰曲輪状の平場が何段にも築かれている。

この60.2mの最高部付近は一見曲輪に見えるが、ほとんど自然地形であり、畑として後世利用されていたのであろうか、幅3m、長さ10数mほどの浅い溝が掘られている。また、東側には尾根道となる小道が、山裾を巻くように堀切状に切られ麓から登ってくる。この小道から尾根最高部へとジグザグに登る通路が造られ、畑などで利用されていたものと判断される。

この最高部からほぼ西方向に凸形に張り出した地形となるが、上面はまったくの自然地形であるのに対し、北側と南側斜面は谷部を見事に腰曲輪状に整形している。また、張り出した先端にも数段にわたる腰曲輪を設けている。谷部と支尾根部は切岸によって遮断され、取りつきを不可能にしている。この点では城郭遺構とするに何ら困難はない。

それでも、これらの腰曲輪状の平場は、後世の畑利用のための改変とも考えられよう。しかし、本城跡と同時代に機能したと考えられる白浜城跡においても、北側斜面にこれをもう少し大規模にしたような遺構が見られ、共通性を見いだすことができる。

いずれにしても、この尾根上において遺構として考えられる範囲は、ほぼこの周辺にとどまる。人工を感じさせる地形改変は、斜面の腰曲輪状地形を除き、これより北方向にはほとんど見られない。しかし、城外となる西側斜面は切岸状に整形されているところも多く、城郭遺構とみてよいかどうか判断が難しい。また、以南にも人工的改変がまったく見られない。東側斜面の段々畑は後世の改変と思われる。よって広義の城郭の範囲は、このピーク南面より以北とできよう。

(5) まとめ

稲村城は歴史的にみて、天文2～3(1533～34)年におきた里見氏の天文の内乱時に里見氏の本拠として登場し、それ以降は歴史の舞台から姿を消してしまう。上総へ領国拡大を目指した里見氏の歴史から考えても、また遺構を縄張の観点からみても、戦国後期までの使用は考えにくい。この点は、外郭部の腰曲輪状遺構の評価にも関わってくる。明らかな切岸をもつ腰曲輪ではあるが、上面自然地形を多く残すことから、完成された城郭遺構とは言い難い。ある時点で造作が途絶した可能性も考えておきたい。それは天文の内乱と考えるのが自然ではないだろうか。

(遠山成一)

【参考文献】

千葉県教育委員会 1983『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第4集—稲村城跡・臼井城跡発掘調査報告—』
遠山成一 1996「稲村城の構造について」『千葉城郭研究』4 千葉城郭研究会

Ⅱ 稲村城跡と歴史的環境

1. 前期里見氏と稲村城

房総里見氏の歴史は、稲村城を主たる舞台にして起こった天文2～3(1533～4)年の内乱によって大きく二分される。その内乱とは、それまでの里見氏が抱えていた構造的矛盾が爆発した結果、嫡流家が滅びそれを庶家が篡奪するという下剋上によって終結したものと評価される。また現在里見氏の歴史の分岐点となったこの乱を天文の内乱（内訌）とよび、ここで滅亡した義実から義豊に至る嫡流の系統を前期里見氏、以後里見氏を発展させた義堯の系統を後期里見氏としているが、その前期里見氏が本城とし、ともに滅亡したのが稲村城だったのである。つまり、稲村城の問題はまさしく前期里見氏の問題なのである。

ただ敗れた側の歴史が正当に残ることが稀なように、前期里見氏の歴史を正しく裏付けてくれる史料はほとんど残っていない。また残っていたとしても後期里見氏の歴史過程で不当に歪曲されているものが多く、さらにそこに江戸時代以降のさまざまな潤色が施された軍記・系図といった史料が加わることで、その正確な歴史の解明を一層困難なものにしている。前期里見氏や稲村城の歴史が謎とされる所以である。ただ注目されるのは、そのなかでも常に稲村城は前期里見氏の当主が拠った城郭として位置付けられていることである。前期里見氏の歴史にとって、稲村城の存在意義が極めて大きかった反映であろう。

ところで、これまで伝説上の人物とされてきた房総里見氏初代里見義実の存在自体は、近年里見氏研究が進展するなかで間違いのないものと評価されるが、義実が当初拠った城郭は房総半島南端の白浜城だったとされる。その白浜の地は、太平洋海運を背景とした東国の軍事的経済的拠点であり、そもそも関東管領山内上杉氏が掌握する地でもあった。それゆえ関東足利氏と山内上杉氏との一大抗争たる享徳の大乱の過程で、足利氏方として安房へ入部した義実が山内上杉氏との抗争の拠点として本城を構えたと考えられている。

ではなぜ里見氏は白浜城から稲村城へ本城を移転したのかが問われなければならない。その点、①稲村城の位置が、安房地方最大の穀倉地帯にして、古代より政治・経済の中心地たる館山平野（府中）の掌握に非常に適していたこと、②稲村城直下滝川を利することで、稲村城はかつて安房国府外湊としての機能を担っていた湊を通じて江戸湾交通ともつながっていたこと、しかも③稲村付近が、館山平野奥部の水系の結節地だった可能性、といったようなことがこれまでも指摘されているが、さらに①の具体的事例として近年注目されていることは、稲村城にほど近い萱野およびその周辺一帯が、近年の発掘調査によって、中世の早い段階から水運と陸運の結節地として発展した安房地方随一の町場（流通経済の拠点）だったらしいことが明らかにされてきたことであろう。つまり稲村城は、政治機能や農業生産基盤のみならず、流通経済の掌握をも意図した城郭だった可能性が強くなってきたのである。

そのうえ白浜城が、稲村城に拠点を移した後もなお里見氏の重要な城郭として機能していたことをみれば（里見義豊書状「上野家文書」）、その白浜城の軍事的経済的機能を合わせること

で、里見氏は安房国内の枢要な機能すべてを掌握したことを意味したのである。里見氏にとって稲村城は、まさに安房一国を掌握したことを意味し象徴する城郭だったのであろう。

次に視点を变えて、天文の内乱で滅亡した前期里見氏と稲村城は、どのような人達によって支えられていたのか考えてみよう。そこで注目したいのが、次の史料である。

今度抽粉骨、忠信無比類候条、神妙之至候、然者、上野筑後守方一跡之事、佗言候、名代並一跡之事、進置候、此上之事、嗜人衆可被走回（廻）事、専一候、恐々謹言、

天文貳年^{癸巳}八月日

時茂（花押）

上野弥次郎殿

追而委様体、肥田可被申候、

（「上野家文書」）

これは日時からみてもまさに天文の内乱の最中に出されたものである。ここで上野弥次郎は戦闘の勝利を背景に嫡流家の財産と地位を要求し、それを正木時茂が認めたのである。ということは、逆にいえばここで滅んだ嫡流家上野筑後守が前期里見氏（義豊）を支えていたことになる。同族間においても両派に分かれたすさまじい闘争が繰り広げられたのである。

このような状況は、他からもうかがえる。安房安西氏は、古代以来の国衙在庁系の豪族のうえ館山平野にも大きな権限を有しており、それゆえ房総里見氏の草創期や稲村城への進出にも大きな役割を果たしたと考えられる氏族である。その安西氏の系図（東京大学史料編纂所謄写本）からは、安西氏では一族内でそれぞれが里見氏嫡流家・庶家を問わず深い関わりを持っていたが、それだけに里見氏内部の闘争から発展した天文の内乱においてはそれぞれの対応が分かれざるをえなくなり、結果、明確に没落した系統がある一方、以後発展をみた系統もでた、というようなことがよくみてとれるのである。

また前期里見氏とともに活躍していたことが明確な中里・木曾・堀内・師・竹田などの諸氏も、後期里見氏の歴史のなかではほとんど登場しなくなる。ということは、見えなくなってしまった諸氏こそ、逆に前期里見氏を強力に支えていた存在だったに違いない。

このように、前期里見氏に従って稲村城とともに滅亡し、歴史の表舞台から消えていった存在も多かったのである。天文の内乱が里見氏歴史上の大きな転換点といわれる所以である。

（滝川恒昭）

【主要参考文献】

佐藤博信 2000『江戸湾をめぐる中世』思文閣出版

同 2001「房総の天文の内乱」『千葉県の歴史 資料編 中世3』千葉県

同 2006『中世東国政治史論』塙書房

滝川恒昭 1992「房総里見氏の歴史過程における『天文の内訌』の位置付け」『千葉城郭研究』2 千葉城郭研究会 P29-49

同 1996「房総里見氏の歴史における稲村城」『千葉城郭研究』4 千葉城郭研究会P95-103

同 2003「白浜城と前期里見氏」『白浜城跡調査報告書』白浜町教育委員会

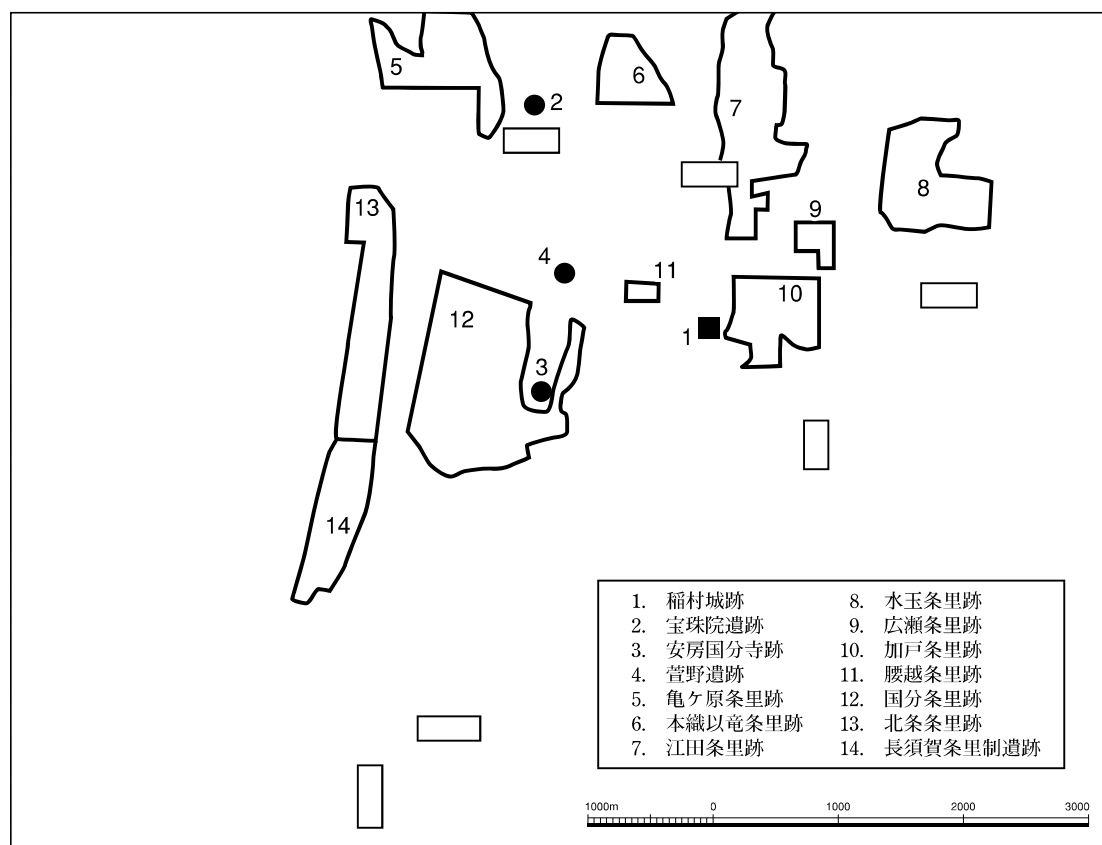
2. 稲村城跡周辺の歴史的環境

安房地方最大の穀倉地帯であり、古代から政治・経済の中心地である館山平野を掌握するための絶好の地に稲村城跡(1)は位置している。その北西約2kmにあるのが、南房総市府中である。「府中」という地名は、全国的にみても国府に縁のある地名であることが明らかであるのだが、安房国府の所在を裏付ける痕跡は確認されていない。しかし一帯に広がる宝珠院遺跡(2)は、平久里川左岸の広大な河岸段丘上にあり、平安時代の『倭名類聚抄』に、安房国府は平群郡に所在していたと記されている。この一帯が、国府推定地として有力であることは確かである。

府中の南約2kmにあるのが、安房国分寺跡(3)である。安房国は養老2(718)年に上総国から平群・安房・朝夷・長狭の4つの郡を割いて国ができたが、天平13(741)年12月には上総国に併合され、天平宝字元(757)年に再び分立するという過程で成立した。741年2月に聖武天皇が『国分寺建立の詔』を出しているが、安房国は上総国への併合、再分立という背景があったため、安房国分寺の造営は757年以降ではないかとされている。

国府推定地・国分寺跡の周辺には、昭和40年代に耕地整理が行われるまで、条里制の跡が数多く残っていた。府中西側の亀ヶ原条里跡(5)、安房国分寺跡西側の国分条里跡(12)、東側の江田条里跡(7)などである。これら古代の条里制水田をもとに、中世の荘園制が広がっていく。

稲村城跡の北約1kmにある大字「広瀬」は、『相州文書』の弘安3(1280)年5月5日「亀山上皇院宣写」の記述により、広瀬郷として群房荘に含まれていたことがわかる。鎌倉時代、群房荘は



第1図 稲村城跡周辺の主な古代・中世の遺跡

新熊野社領で、貞治6(1367)年に鎌倉公方足利基氏の遺名によって鎌倉瑞泉寺に寄進されており(『空華日用工夫略集』貞治6年4月26日条)、康応2(1390)年2月11日「安房国守護上杉某遵行状」(鶴岡神主家家伝文書)などによると鶴岡八幡宮の支配下にあった。また、時期は前後するが、貞治4(1365)年5月9日の「円覚寺文書」から、足利尊氏が長田保西方を円覚寺に寄進したことがわかる。長田保は、館山平野最南端の西長田・東長田が故地とされている。

このように中世の館山平野一帯は、鎌倉の寺社との関係が強い地域であることを文献史料から知ることができるが、それは考古資料からも裏付けられている。稲村城跡の北西約1kmにあり、安房国分寺跡に隣接する萱野遺跡(4)から、鎌倉極楽寺などの鎌倉時代後半の寺院から出土する瓦と類似する三巴文の軒丸瓦と剣頭文の軒平瓦が出土している。その年代は、13世紀後半から14世紀前半と推定され、同年代の三鱗・花菱文様の平瓦も出土している。これらは、鶴岡八幡宮、東勝寺、極楽寺、建長寺など北条得宗家と関係の深い寺社に限定して出土するタイプの瓦であるため、出土地点周辺に建立された寺院は、北条得宗家と密接な関係をもった寺院ではないかとされている。鎌倉との強いつながりは、館山平野周辺の丘陵部に多数残されている鎌倉の墓制である「やぐら」がつくられる素地を準備したともいえる。

南北朝・室町時代の館山平野一帯には、鎌倉時代の北条氏領や足利氏領を引き継いだ鎌倉公方の御料所が存在した。稲村城跡の東にある大字寶貝字宝ヶ谷が故地とされる安東郷朴谷村が、応永30(1423)年12月8日の「鎌倉御所持氏御教書」(極楽寺文書)にみえ、鎌倉公方の足利持氏は、安房国守護上杉定頼に対して、同地を鎌倉極楽寺へ渡すよう命じている。

このことが示すように南北朝時代以降、安房には上杉氏の家臣のほか足利氏の家臣たちが入部し、その権力基盤を担っていた。一方で、館山平野一帯の在地領主層として、安西氏・沼氏・安東氏・山下氏などが知られているが、具体的な行動はあまり知られていない。そのなかで、前記の応永30(1423)年「鎌倉御所持氏御教書」に、「安東郷内朴谷村安東又三郎跡事」という記述がある。安東郷の故地とされる大字安東・水岡・寶貝一帯には、やぐら群や千手院宝篋印塔をはじめとする中世石造文化財が濃密に分布し、安東氏の勢力は周辺地域にも及んでいたと推測されている。しかし「安東又三郎跡事」との記述から、15世紀前半には安東氏の勢力が衰退していたのであろう。

在地の領主たちは、いずれかが巨大領主となるよりも、対立を含みつつ中小領主としてまとまった状態であったとみられ、それらを統合する役割を担ったのが、「里見氏」だったのではないかとされている。

(杉江 敬)

【主要参考文献】

館山市教育委員会 1980『安房国分寺』

今泉潔 1988『古代寺院跡(宝珠院)確認調査報告』千葉県教育委員会

杉江敬 1996「各地区の概要 安房南部地区」『千葉県史編さん資料 千葉県やぐら分布調査報告書』千葉県

風間俊人・笹生衛 1998「萱野遺跡」『千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料』千葉県

佐藤博信 2007「房総の戦乱と古河公方の支配」『千葉県の歴史 通史編 中世』千葉県

3. 関連資料と周辺情報

戦国期の稲村城の姿や役割を明らかにすることができる直接的な資料はほとんど確認されていない。おそらく残されている資料自体が稀なのであろう。そうしたなかで稲村城についての理解を深めていくには、稲村城を取り巻く周辺の歴史環境について明らかにすることが重要であり、とくに中世後期を中心に関連資料の所在を確認しておく必要がある。ここでは稲村城跡の周辺に残されている資料から、稲村城の役割や存在した環境について考えるための材料を提供しておくこととする。

(1) 文献史料

近年里見氏受発給や家臣発給の古文書が種々確認されてきているが、その多くは天文後期以降の後期里見氏に関わるものであり、稲村城を拠点とした前期里見氏に関する古文書は依然少ない状況にある。とりわけ稲村城に直接関わる古文書は確認されていないため、軍記物と近世の地誌類を中心とした記録に頼らざるを得ないことから、研究の進展が見られない現状がある。

そのため従前の研究では軍記物からの引用で稲村城を里見氏の初期居城と認識してきたが、戦国時代の成立とされる史書『鎌倉大草子』（群書1976、P701）の康正2(1456)年の項に記される「上総国へは武田入道打入て、庁南の城・まりが谷の城両所を取立、父子是に楯籠て国中を押領す。房州の里見是に力をえて、十村の城よりおこりて国境へ勢を出し所々を押領す」の「十村の城」を稲村城とする見解（滝川 1996、P99）が、交通や水利などの掌握にかかわる立地の条件を踏まえて定着しつつあり、稲村城をもって前期里見氏の居城とする根拠にされるようになってきている。

時期は下るが、近世初頭の慶長2(1597)年里見義康知行充行状（千葉 1962、P17）で、唯一稲村城の城下居住域に結びつくと思われる記録が見られる。「山下郡稲村において、角田九郎五郎居屋敷、門家共に出し候、違乱あるべからず候。以上。慶長弐 十二月三日（「義康」黒印）石井駿河との」がそれである。慶長11(1606)年に使番十人衆であった石井駿河守は、この年に実施された太閤検地に基づく里見義康の知行割りで、11月に稲村で120石（200石の誤りか）の知行所を得ていた。これにともなって、翌月にそれまで稲村の屋敷に居住していた角田九郎五郎がこの地を離れ、新たに石井駿河守がその居屋敷を与えられることになったというものである。これは、この屋敷が角田氏や石井氏が所有する屋敷ではなく、里見氏の管理下にある屋敷であったことを示していると捉えることができるが、稲村の集落立地から考えれば、その屋敷は稲村城下に所在していたと思われ、またこうした家臣の配置は、慶長期の段階で里見氏によって稲村城の維持ないし管理が行われていたことを示唆するものととらえられるだろう。

なお、石井氏の本貫地は稲村の北方1.5kmに位置する江田村である（千葉 2001、P681）。駿河守を先祖とする石井氏は現在も館山市江田に居住されており、里見氏の没落にともない本貫地へ帰農したことが考えられる。このことは、里見家の家臣として稲村で所領と屋敷の給付が行われても、旧来の在地経営者として所有する本貫地の土地経営は平行しておこなわれていた

ことを示していると考えるべきだろう。

次に稲村城跡の立地を広い視野で考えるために、周辺地域に関する15世紀を中心とする里見氏以前の史料に目を向けてみる。

里見氏以前の史料については、東へ1.5kmに位置する安東郷（館山市安東）に関するものが知られている。応永30(1423)年に安東郷朴谷村（館山市寶貝）が鎌倉極楽寺の宝塔院領であり、安東又三郎の旧領であったこと、このとき真田刑部左衛門尉が押領していたことなどが記された極楽寺文書（千葉 1966、P20）である。安東郷は文和2(1353)年に足利尊氏が近江国の佐々木長綱に所領として与えたことがあり、それ以前は得行四郎入道なる人物の所領であった。得行氏は尊氏と対立した直義の被官と思われ、観応の擾乱によって尊氏の被官佐々木氏に取って代わられたものと考えられる。真田氏については三原郷（南房総市和田町）に所在する日蓮宗正文寺の前身寺院の大檀那としての伝承が残されている三浦系の武士団とされ、安東氏については鎌倉御家人安東太郎の末と思われ、南北朝期を中心とした石造物が豊富に見られる安東郷を本貫地とする武士団とされている。どちらもやぐらが濃密に分布し鎌倉との結びつきが窺える地域に関する史料である。

また稲村城跡から東へ3kmの朝夷郡久保郷（南房総市）については、宝徳元(1449)年以前は鎌倉公方足利氏の被官上野弥太郎の所領であったこと、それがこの年に扇谷上杉氏の被官恒岡源左衛門尉の所領になったことを記した上杉顕房の充行状（千葉 2003、P522）がある。鎌倉時代中末期以降、朝平郡（朝夷郡）は足利氏の所領であったが、応永3(1396)年にはその内の朝平郷南方が山内上杉氏の所領になっており、享徳の大乱直前における房総の支配を巡る足利氏と上杉氏の争奪の一端が窺える史料である。この頃朝平郷南方の中心域とされる白浜には、湊の管理のために上杉氏の被官木曾氏が入部していたとされ、神余郷の神余氏も上杉氏の被官になるなど上杉氏の支配が広がっていたところへ、足利方の里見氏による白浜奪取があり、里見氏の歴史が白浜から始まるという解釈が広がってきている（佐藤 2000、P66）。

稲村城跡の北方、館山平野の中央に広がる群房庄については、東西に分かれ、ともに南北朝期には鶴岡八幡宮領であったが、鎌倉瑞泉寺にも当庄が鎌倉公方から寄進されており、応永2(1395)年には領家職をめぐる対決が行われている。その後応永25(1418)年までに駿河国守護の今川範政の所領になっている（千葉 2005、P411）。所領経営の実態はなかったようだが、前年に終結した禅秀の乱の恩賞と思われる。庄域に広瀬郷（館山市広瀬）が含まれることが知られているが、稲村城跡から西へ1.5kmの阿布里保（館山市安布里）も嘉慶・明徳年間（1387～94）頃には鶴岡八幡宮領であり、ここも庄域に含まれていた可能性がある。

南西へ4.5kmに位置する長田保西方（館山市西長田）が南北朝期に鎌倉円覚寺の仏日庵領であったことがわかる円覚寺文書（千葉 1966、P42）もよく知られており、応安2(1369)年には在地の安西太郎左衛門入道の押領を受け、応永12(1405)年には丸郷（南房総市本郷）の丸孫太郎入道の押領をうけていたことがみえる。（岡田晃司）

<引用・参考文献>

- 滝川恒昭 1996 「房総里見氏の歴史における稲村城」『千葉城郭研究』4 千葉城郭研究会 P99
佐藤博信 2000 「安房木曾氏をめぐって―白浜との関係を中心に―」『江戸湾をめぐる中世』
千葉県 1962 『千葉県史料 中世篇 諸家文書』 P17
千葉県 1966 『千葉県史料 中世篇 県外文書』 P20・P42
続群書類従完成会 1979 『群書類従・第二十輯 合戦部』 P701
千葉県 2001 『千葉県の歴史 資料編 中世3 (県内文書2)』 P681
千葉県 2003 『千葉県の歴史 資料編 中世4 (県外文書1)』 P522
千葉県 2005 『千葉県の歴史 資料編 中世5 (県外文書2)』 P411

(2) 中世石造文化財 (第2図、第3図)

稲村城跡周辺地域における中世石造物を概観する。他地域に比べて種類が多く、数的にもかなり濃密に分布している。まず在銘最古例としては、府中に近い南房総市本織(旧三芳村)・延命寺(A1)の武蔵板碑がある。正安3(1301)年の紀年銘を有し、天蓋そして蓮座上に弥陀三尊の種子を配する優品で、県の有形文化財指定を受けている。当寺は後期里見氏の菩提寺として知られているが、この板碑は延命寺開創以前のもので、国衙在庁の役人安西氏に關係する石造物ではないかと考えている。至近距離の地には安西氏が拠ったとする平松城跡があり、当寺は本来安西氏ゆかりの寺院として存在し、後世里見氏が再興した可能性も考えられる。この寺には、開基に絡む里見実堯もしくは義堯の供養塔か墓塔と思われる安山岩製の宝篋印塔、在地の蛇紋岩を用いた宝篋印塔・五輪塔といった多くの石造物が現存する。そして少し離れた歴世住持の墓域には、「當寺開山大和尚」と刻んだ無縫塔(図版8-1)が存在し、これは里見氏が招請、永禄元(1558)年に遷化した延命寺の開山吉州梵貞和尚の供養塔と考えられ、様式的にもまた16世紀中葉に比定できる石造遺品である。

次の遺例は稲村城跡東側の斜面、通称五輪様の地(A2)から出土した武蔵板碑である。材石は緑泥片岩、高さ40cm足らずの小品だが、元応元(1319)年の年紀が認められる。現在は大綱の大巖院で管理しているが、これらは国人領主層の動向を示唆し、14世紀前半における稲村城跡周辺の歴史的景観を伝える稀少な資料ともいえよう。

これに続くものが安東・千手院やぐら(A3)の丸彫地藏菩薩坐像である。伊豆系の安山岩を材石にしており、背面に文和2(1353)年の紀年銘が刻まれる。掘り抜きの円座に安置されることから、これによってやぐらの開鑿年代も本像と同じ頃に推定できるのである。千手院は二子・安養寺の境外堂で、この「やぐら」が主体のいわゆる窟堂であり、同時に土豪安東氏の墳墓堂として、聖域的存在であった可能性を指摘しておきたい。内部にはさらに当院の本尊像である石造千手観音坐像が安置される。その彫法から近世作を唱える人も多いが、周囲に現存する近世代のそれと比較し、いかにも作風が異なること、やぐらの正面に位置し地藏像と同じく掘り抜きの円座に置かれ、しかも木造の厨子(朽廃し現在は大谷石製)を伴い崇拜されてきたことを

思えばやはりやぐらの開鑿時、すなわち14世紀中頃に当院の本尊像として造立・安置されたものと考えたい。加えて本やぐらの真上、墓地に隣接した平場には190cmにおよぶ本格的な宝篋印塔^(註1)が存在する。銘文は確認できないが、これも14世紀前半の作例と判断する。地元では「式部さま」と呼んで参拝することが慣習となっており、このことはおそらく八省の一「式部職」を名乗る安東氏の存在を伝承するものであろう。千手院やぐらにはほかにも多くの石造物を伝えている。とりわけ「己亥」銘の日待供養塔は興味深いものである。年号は無く中央に聖観音坐像を陽刻、向かって右に「日待之供養」、左には「己亥八月日」の文字を刻んでいる。そこでこの「己亥」が問題となるが、筆者はこれを天文8(1539)年に比定し、全国最古の遺例と考えるのである^(註2)。ただ現時点において中世段階で日待が8月に行われた実証例が無いため、今後それを立証する文献等の出現に期待がかかる。ちなみに茨城県つくば市山木の円乗寺には慶長年銘を有する日待板碑が存在し、金剛界五仏の種子に加え、「御日待供養」「人数十七人如件」それに「慶長十九年甲寅八月十六日敬白」と刻まれている。

千手院後方の丘陵斜面には市指定となっている「水岡やぐら」(A4)がある。このやぐらは古代横穴墓の転用とされるが、内部壁面には実に17基もの五輪塔が刻まれ異観を呈する。梵字を墨書したのものもあるが紀年などは確認されていない。初期のものは鎌倉末～南北朝期、14世紀前半までのぼると思われ、様式や手法の変化は室町時代末、16世紀の後半に至るまで連綿と彫り継がれてきたことを物語っていよう。

また最近の調査成果から、旧千倉町牧田山中(A5)での貞治5(1366)年銘を伴う五輪塔の出現を報告したい。在地産の凝灰質砂岩(?)を材石とするもので、現時点における本県在銘五輪塔の最古例である。「頼円」の法名を併刻するが人物像の解明には至らない。

さて稲村城跡の西方に位置する国分寺(A6)には五輪塔の完全形(反花座は認められない)が現存する。安山岩製の優品で、四方に五大の四転を表現するが紀年銘等は確認できない。里見氏以前の、14世紀末から15世紀初頭の作例と考えたい。

稲村城跡に程近く、北方の滝川に架かる「箱橋」から約200mの地に真言宗延命院(A7)がある。ここに生え抜きの大きな岩盤があり、その基部には「やぐら」が開鑿され、壁面に厚肉の五輪塔2基が刻まれている。様式的に見て15世紀から16世紀前半の造営と考えられ、情報は乏しいが前期里見氏に関係した人物の石造物と推断できるのである。

16世紀の在銘遺品として水岡・蓮蔵寺(A8)入口の作例(図版8-2)を紹介する。一は僧形で禪定印を結び、持物はなく地藏像か否かは判然としない。像の、向かって右脇に天文12(1543)年の年紀を認めるが他の文字は不明である。他の一は地藏像であり僧形、両手で宝珠を持ち、錫杖を像右脇に立てる異形である。やはり天文12(1543)年銘が刻まれている。さらに像容のよく似た如意輪観音像がある。風蝕のため文字の解読は困難だが、同時期の一連の制作であることに相違なく、石工もまた同一人とみたい。これらは16世紀中葉の基準作例として、類例を検証する上で重要のみならず、上述の千手院日待塔を考える上でも意義ある傍証資料といえよう。稲村城廃城後間もないもので、義豊と共に討死したかあるいは天文の内乱を目の当りにした人々

の供養塔であろう。

北方の竹原・阿弥陀堂（通称光堂）(A9)には、弘治3(1557)年在銘塔（塔身・基礎部）を含む宝篋印塔群(図版8-3)が知られる。塔身を長くする異形で、ここに舟形龕を彫り窪め仏像を刻んでいる。在銘塔は正面龕部に線刻の蓮座を表現し、胎藏界大日如来（？）坐像を陽刻する。「□□禪定門」と法名を刻むが人物は特定できない。基礎は2区に分けて輪郭をとり、段形はつくりらず単弁の反花を薄く彫り出している。蛇紋岩を材石にしたかなり大型のもので、基礎が4基分、塔身は3基分、ほかにも笠部・相輪部それに規模の小さい宝篋印塔の基礎、五輪塔の水輪部などが散在する。この中には基礎・塔身と一具のものがあるに違いない。背後の墓地にも天文・永禄年銘を有する小型の塔身が確認できる。類例は少なく、南房総市府中・宝珠院、同市本織・延命寺、鴨川市池田・地藏院、同市浜荻・薬師堂、同市打墨・宝国寺等に点在する程度である。光堂は天文8(1539)年、正木時茂の家臣吉田下野守の造営といわれ、吉田氏はまた同21(1552)年に本尊の彩色・再興を行っている^(註3)。したがってこの宝篋印塔は、立地や年代的な面から吉田下野守あるいはその縁者の石造物と断定したい。正木時茂の菩提寺は宮山（鴨川市）の長安寺だが、材石として用いた蛇紋岩は長安寺に近い嶺岡山系で産出するものである。あらためて正木氏との関係、加えて後期里見氏義堯との関係が彷彿される。義豊没後の稲村城周辺における権力構造を探る貴重な資料の一といえよう。

竹原の相賀地藏堂(A10)にも同時期の石造物が現存する。こちらは完全無欠な、光背形虚空蔵菩薩坐像である。石造の虚空蔵像は遺存例が少なく、安房地方では近世作を含めても数点しか知られない。稀少な中世の作例で、宝冠をいただき、左手宝珠、右手宝剣の一般形である。虚空蔵とは「虚空（空間）のごとく無量の智慧や功德を蔵する」と説かれ、「知恵を授ける菩薩としての信仰を集め」^(註4) たという。当地における信仰形態は不詳だが、貴重な文化遺産の一として評価したい。紀年銘は認められないがこれも天文期のものであろう。

稲地区の東方、寶貝・覚性院やぐら(A11)には光背型の阿弥陀如来石仏がある。尊名を示す定印や肉髻、それに耳朶とか面相・体部はほぼ原形を保つ。ただ光背部の損傷が著しく、しかも首部で二折しており何とも痛ましい。尊像は厚肉に表現し、光背部を含めた側面観も厚手に彫成するのである。他例に見るように、この部位に年紀など銘文が刻まれたことであろう。豊満で柔和な表情は近世仏のそれとは明らかに異なるもので、穏やかに坐し優しいまなざしを向ける尊像が、多くの武士たちに救いの手を伸べ、安らぎを与えたことは想像に難くない。寶貝地区は往昔朴谷村といい、15世紀初頭には鎌倉極楽寺の子院宝塔院領であったことが知られる。応永30(1423)年の鎌倉公方足利持氏御教書は、かつて安東又三郎が支配していたこの地を真田刑部左衛門尉が横領したため、極楽寺に返還するよう安房国守護上相（杉）定頼に命じている^(註5)。本像の造立はこれより1世紀あまり下った16世紀の中頃、天文～永禄期と考える。材石は蛇紋岩である。

次の例は大井・路傍のやぐら(A12)内にある舟光背形十一面観音像と如意輪観音像である。如意輪観音は損傷が激しく（上部欠損）、本像を真似た、近年作の尊像が並座する。十一面観音

は坐像で、頭上に九の変化面、構造上後方面はないが頂上仏面・本面とあわせて十一面につくる。持物はなく膝上にて禪定印を結んでいる。厚肉の丁寧な彫像だが銘文は確認できない。八方向に天・地を加えた十方、すなわちすべての方角に面を向けて、あらゆる人々の苦難を救済する能力を示すのである。彫法・像容から一連の天文～永禄期の作例と捉えている。如意輪観音も同時期の作である。

ここで稲村城跡の南方を見てみよう。館山市古茂口の福生寺(A13)墓地には凝灰岩製の大きな五輪塔(図版8-4)があり、里見義豊の室、法名福生寺殿一溪妙周大姉の墓と伝えている。残存高は112cm(空・風輪部欠、復元高約150cmか)を計測する(火輪上に宝篋印塔の笠、五輪塔の空・風輪を据えるがこれは別材)。室は天文3(1534)年、夫の後を追ひ自害し果て南条の姫塚に葬られたという。しかし本塔は五大をあらわす梵字が雄渾な薬研彫り、しかも塔形に安定感があり、火輪の軒表現などを考えればどうみても里見氏の時代より古く、それも15世紀以前に遡る作例に思えるのである。

近くの泉福寺(A14)には形のよい五輪塔が遺存しており、そしてその延長上に位置する大貫(南房総市)・小松寺(A15)周辺にも、やぐらや五輪塔・宝篋印塔といった中世石造物を認めるのである。

このほかでは水岡の紫雲寺(A16)や蓮蔵寺(A8)、安東の高田寺(A17)、そして稲地区でも個人宅(A18)や路傍(A19、20)等に、また地域周辺の共同墓地ややぐらにも五輪塔・宝篋印塔が確認されるのである。完形品はなく残欠部材にすぎないが、そのいずれもが当地の歴史を探り紐解く貴重な資料であるといえよう。

以上、当地域内の対象物を概観した。当該資料を実査した結果、時代の下降に従って点数は増加、半面規模が著しく低下する傾向をみた。これは施主層が下層階級にまでおよんだことを意味しており各地に共通した事象といえる。地域的傾向としてはまずその種類が豊富であること、時代的には14世紀初頭から16世紀にいたる、およそ300年におよぶ作例が認められたこと、従前は鎌倉地方の占有物とまで言われた「やぐら」が、地域内において多数確認されたこと、石材の種類が多岐にわたる一方で、やはり現地調達の特に蛇紋岩を使うケースが際立ち、他国産を用いる場合は必然的に規模が小さくなる、などの点の特筆できよう。視点を変えれば、断片的ではあるが、15世紀以前、つまり里見氏入部以前の石造物が目についた。このことは在地における国人層の動向とも重なるものである。そして次世代の、16世紀にかかる石造物も相当数を確認できたが、これらは稲村城の周辺部に集中し、城郭域に限定した場合にはその数が激減する。こうした傾向は稲村城の成立・廃城と無縁でないのかもしれない。

また竹原地区の、吉田下野守関連に推定できる在銘塔は興味深く、義堯以降の在り地情勢を考える上で注視されてよい石造遺品である。ともあれ稲村城跡周辺地域の重要性について、石造物の遺存例から指摘することで総括としたい。(早川正司)

(註1) 早川正司 1975 「安東千手院宝篋印塔について」『会報』第8号 館山市文化財保護協会

- (註2) 早川正司 1983 「館山市千手院やぐらの文和銘地藏と日待供養塔について」『房総の石仏』第2号
房総石造文化財研究会
- (註3) 中村 元 1989 『岩波仏教辞典』 岩波書店
- (註4) 清水眞澄 1987 『館山市の仏像』 館山市立博物館
- (註5) 千葉縣史編纂審議会 1966 「鎌倉御所持氏御教書・極楽寺文書」 『千葉縣史料 中世篇 縣外文書』 千葉縣

(3) 中世の仏像彫刻 (第2図、第3図)

館山市内の仏像彫刻については昭和62年に調査報告(市博 1987)があり、平安時代12軀、鎌倉時代6軀、南北朝時代9軀、室町時代38軀が確認されている。平安時代の仏像はほぼ藤原仏である。室町時代38軀のうち、南北朝末から室町初期と判断された3軀と室町末から江戸初期と判断された7軀を除く28軀の中に、前期里見氏の時代に該当する像が含まれていることになる。また南房総市白浜町でも町域での調査報告(白浜 1999)があり、平安時代9軀、鎌倉時代5軀、南北朝時代2軀、室町時代14軀が確認されている。

稲村城以前の仏像を安置する寺院の立地を考えながら、館山平野から豊房地区の谷部にかけての平安から南北朝期の仏像彫刻の分布をみしてみる。まず安房を代表する観音霊場那古寺(B21)に藤原期と鎌倉期の千手観音立像がある。ここは中世には海に面しており浜から舟の便もあった土地であり、鎌倉前期に真言宗寺院として再興する際の大檀那として安西氏の存在が想定できる。那古山の北側に位置する川名の長勝寺(B22)には南北朝期の地藏菩薩坐像がある。寺が面するどどん川の河口が中世の船形湊であったと考えられる。平久里川下流部の府中に所在する宝珠院(B23)には徳治3(1308)年の十一面観音立像があり、支流滝川を挟んで向かいに所在する高井の善浄寺(B24)には鎌倉末から南北朝期とされる地藏菩薩像がある。ともに平久里川に接し国府湊に近い立地である。滝川の中流域にあたる山本の三善寺(B25)には鎌倉時代の伝阿弥陀如来像と南北朝期の善光寺式阿弥陀三尊の両脇侍像、川向いの腰越延命院(B7)には藤原期の菩薩立像があり、ともに萱野遺跡で発掘された北条得宗関連施設に近いが、この府中から腰越にかけての地域は南北朝期に鶴岡八幡宮領であった群房庄の庄域内であった可能性が高い。また同じ鶴岡八幡宮領であった阿布里保の遺称地である安布りの源慶院(B26)には南北朝期の地藏菩薩坐像が安置されている。

鎌倉中期の地藏菩薩立像がある平野部最奥の竹原相賀地藏堂(B10)は、外房・東上総方面へ通ずる街道に面するが、この道を掌握する役割を持つ明星山城主であり、かつ戦国末に里見氏一族となった薦野甚五郎所縁の堂と伝えられている。薦野氏は鎌倉御家人として知られる多田良氏の末と考えられる。その南方朝平郷に通ずる道に面する水岡地藏堂(B27)にも鎌倉期の地藏菩薩像と南北朝期の十王像があり、延文元(1356)年の釈迦如来坐像を安置する蓮蔵寺(B8)とともに、南北朝期は鎌倉極楽寺領であり安東氏の本貫地である安東郷に所在する。また地藏堂の立地は安房地方を代表する古刹、大貫の小松寺(B15)と久保の真野寺(B28)を丘陵尾根で結ぶ

中間点にあたる位置でもある。小松寺は応安7(1374)年の梵鐘が伝来するほか数多くの平安仏を安置し、真野寺にも建武2(1335)年の二十八部衆像ほか平安・鎌倉期の像が安置されている。

藤原期と鎌倉期の阿弥陀如来立像がある上真倉の長泉寺(B29)は、汐入川に面した方形地に所在し、川の向かいには宇和宿地名があって、その下流側は袋状の菱沼が汐入川の船溜りをなしていたと思われる環境に立地している。この上流域に藤原期の観音菩薩立像と弘安9(1286)年の梵鐘、ならびに称名寺ゆかりの鎌倉時代の密教法具を有する小網寺(B30)があり、また藤原期の観音菩薩立像を祀り南北朝期末の鰐口を有する西長田の観音院(B31)もある。西長田は南北朝期から室町初期に鎌倉円覚寺領であった長田保西方に比定されている。平野・谷部の各寺院がそれぞれ交通の要衝に立地し、鎌倉寺社とも密接に関わる地域に所在していることがわかる。稲村城跡はその中央に位置するわけである。

こうした前史を踏まえて、稲村城跡の眼下に広がる館山平野と城跡南部の丘陵地域で室町時代とされる仏像の所在をみると、第1表のとおり大井の阿弥陀堂(C32)、竹原の光堂(阿弥陀堂・C9)、安東の薬師堂(C33)、水岡の地藏堂(C27)、広瀬の釈迦寺(C34)、山本の竜淵寺(C35)・地藏堂(C36)、安布里の源慶院(C26)、高井の善浄寺(C24)、八幡の阿弥陀堂(C37)、長須賀の来福寺(C38)、上真倉の辻堂(C39)、古茂口の福生寺(C13)・阿弥陀堂(C40)に確認されている。16世紀にあたる室町末期の像は小堂を中心に所在しているが、いずれにしても南北朝期以前の像を有する寺院を核にその周辺に分布していることがわかる。また注目すべきは西岬地区から神戸地区にかけて集中的に室町仏が造像されていることで、海辺を拠点とした新たな造像主体の登場が予測される。館山平野部で小堂を中心に造像されている点についてもやはり新しい造像主体の存在を思わせる傾向ではないだろうか。

また白浜という狭い地域でも室町時代の仏像が数多く確認されていることは注目される。白浜城跡と稲村城跡が直線の丘陵尾根道でつながることをふまえば、文献史料の少ない中では石造物とあわせて前期里見氏の時代の在地状況を考える有効な資料になりうるといえるだろう。

(岡田晃司)

(第1表) 稲村城跡周辺の中世仏

No.	所在地	寺院名	尊名	時代	備考
16	大井	阿弥陀堂	阿弥陀如来坐像	室町時代末	
17	竹原	光堂	阿弥陀如来坐像	室町時代末	天文21年の台座あり
9	水岡	地藏堂	十王像頭部	室町時代末	鎌倉時代の地藏像あり
18	安東	薬師堂	薬師如来坐像	室町時代末	
19	広瀬	釈迦寺	釈迦如来坐像	室町時代	
20	山本	竜淵寺	菩薩坐像	室町時代か	
21	山本	地藏堂	地藏菩薩半跏像	室町時代	文明13年、銚子円福寺旧蔵
7	安布里	源慶院	地藏菩薩半跏像	室町時代	南北朝の地藏像あり
4	高井	善浄寺	如来立像	室町時代か	鎌倉末～南北朝の地藏像あり
22	八幡	阿弥陀堂	弁財天坐像	室町時代末	鶴谷八幡宮旧境内仏
23	長須賀	来福寺	薬師如来立像	室町時代中頃	
24	上真倉	辻堂	地藏菩薩立像	室町時代中頃	
25	古茂口	福生寺	虚空蔵菩薩坐像	室町時代か	
26	古茂口	阿弥陀堂	阿弥陀如来坐像	室町時代前期	

(第2表) 館山市海岸部の中世仏

所在地	寺院名	尊名	時代	備考
香	金剛寺	釈迦如来坐像	室町時代	
塩見	善栄寺	愛染明王坐像	室町時代	鎌倉末～南北朝の薬師像あり
見物	東伝寺	地藏菩薩坐像	室町時代末	
波左間	光明院	地藏菩薩坐像	室町時代後期か	
坂田	西方寺	虚空蔵菩薩坐像	室町時代	
西川名	持明院	聖観音菩薩坐像	室町時代後期か	
坂井	地藏堂	地藏菩薩坐像	室町時代後半	
布沼	東光寺	釈迦如来立像	室町時代後期か	
洲宮	洲宮神社	銅造菩薩坐像 (懸仏)	室町時代	南北朝～室町の天部像あり
藤原	藤栄寺	地藏菩薩坐像	室町時代後期か	
布良	竜樹院	地藏菩薩坐像	室町時代	
布良	竜樹院	地藏菩薩坐像	室町時代	

<引用・参考文献>

館山市立博物館 1987 『館山市の仏像』

白浜町教育委員会 1999 『白浜町の仏像』

(4) 中世に関する伝承 (第2図、第3図)

稲村城跡周辺での中世の伝承については、天文の内乱における稲村合戦に関する伝承がすでに周知のものであるが、鎌倉時代の武将朝夷奈三郎義秀が和田合戦に敗れた建保元(1213)年に据えたという立石伝説や、和田氏との関係を伝える和田前の地名が山本の滝川集落にあることなどは、安房国造の相伴武日が氏神として祀ったとされる木幡神社(D41)もこの地にあることとあわせて、滝川集落が海陸交通の接点となりうる可能性を持った地区であることと無縁の伝説ではないだろう。そのほか寺社・旧家臣・地名などに係る伝承も広くみられるが、稲区の寺社とその周辺の寺社を中心に拾い上げてみた。

安房では珍しい臨済宗である稲の玉竜院(D42)は、瑠璃山と号し薬師如来を本尊とするが、応永2(1395)年に鎌倉建長寺の住持友峯等益を迎えて開山とし創建されたという由緒(明治28年古社寺御調査書上)があり、その後里見義豊のときに再興したとされる。義豊が天文3(1534)年4月に没したあと、その年9月に義豊の墓所を延命寺に移したと伝える由緒があるが、これは実堯の伝承を誤伝したものかもしれない。また里見義頼が天正5(1577)年7月に眼病を患い本尊に祈誓したところ平癒したことを伝え、その年10月に本堂を再建したとしている。慶長期の寺領充行いは確認されないが、近世を通じて二石四斗の朱印地があった。

旧稲村院(D43)は元浄土宗の寺院で、滝響山と号し、本尊は阿弥陀如来である。元禄8(1695)年の由緒書によると、享禄元(1528)年まで稲村院という小院が存在したがその頃に断絶し、寛文2(1662)年に再興されたという。

城山東麓の西柵にある観音堂(旧円通寺、D44)は通称東向き観音と呼ばれるが、古い由緒は伝えられていない。また稲区の鎮守である貴船神社(D45)についても由緒は伝えられていない。なお城跡東端にある愛宕神社(D46)は字鎮守に所在しており、かつて愛宕社が稲村の鎮守

であった可能性がある。また近世には稲村内には牛頭天王・弁才天・山神が祀られていたことが知られている。

周辺には里見氏一族の開基と伝える寺院が多く、稲の東に接する二子にあった日蓮宗法光山妙蓮寺(D47)は里見氏の梅田姫の開基と伝え（現在は二子の妙長寺へ合併）、さらに東の安東にある曹洞宗福智山高田寺(D17)は里見氏の高田姫（高田寺殿花室妙香大姉）の開基とし、同人の天文5(1536)年没の位牌が伝えられている。西に接する山本には大永元(1521)年に里見中務大輔が開基したとする曹洞宗の雲嶺山龍淵寺(D35)、安布里には天正7(1579)年に没した里見義弘の長女佐与姫（源慶院殿一法貞心大姉）を開基とする曹洞宗の安龍山源慶院(D26)がある。源慶院の慶長期の寺領は25石、近世は15石であった。

腰越に長光寺という小字があるが、明治頃までは寺があつて真倉へ移転したと伝承されている。上真倉の戸倉集落には富士山長光寺(D48)という曹洞宗長安寺末の寺院があり、位牌型の里見義康・忠義の供養塔が境内に建てられている。鴨川市の長安寺文書（千葉 2001、P739）では、すでに長光寺が元和2(1616)年に真倉村で寺領10石を与えられていたことが記録され、また慶長11(1606)年には戸倉で新寺山屋敷と寺領10石が重山に与えられているので、この重山が長光寺の住職なのであろう。移転したのはこの慶長頃のことと思われる。里見家の分限帳に「住三」と記されているのが「重山」であろう。これより前の天正17(1589)年に戸倉山を新寄進され、広瀬の釈迦堂免など7貫の寺領安堵と不入を認められた津梁院が、腰越にあったという長光寺の前身と思われる。里見義康・忠義の供養塔があることから里見家との所縁がある寺院と思われるが伝承は残されていない。当初は稲村城跡の至近にあったというところに前期里見氏の時代からの関係をうかがわせている。

竹原の光堂(D9)は吉田山という山号を有し、天文21(1552)年銘の仏像の台座がある（市博 1987）。後に正木大膳家の家臣として現れる吉田下野守が阿弥陀堂と本尊を再興したことが記されている。古茂口の福生寺(D13)は里見義豊の夫人が義豊の戦死を聞いて自害し、その供養のために建立された一溪寺を引き継いだものと伝えられており、この女性は福生寺殿一溪妙周大姉と諡されている。福生寺の西方にその生家とされる鳥山家が居城にした南条城跡があり、その城山の後背に一溪寺があつたと伝承されるが、そこが慶長期以降近世を通じて2石の寺領であった。

稲村城跡内に祀られる正木様(D49)は、城下に居住する正木家5軒で祭祀している先祖神とされている。正木家の先祖については内房正木氏淡路守家の源七郎義断とされている（斎藤 1907、P509）が、地元には正木修理亮弘経という人物を先祖とする伝承もある。『安房志』には稲村城跡に稲村大明神が祀られているとの記述があり、里見越前守忠弘・里見下総守忠光・里見主膳正弘経の霊を祀るとしているが、この三人を先祖とする正木家系図が伝えられ、里見主膳正を正木修理亮（長太郎）として記している。（岡田晃司）

<引用・参考文献>

斎藤東湾 1907 『安房志』 P509

Ⅲ 発掘調査とその概要

1. 調査経過

調査は平成19年11月26日から平成19年12月21日までの期間で実施した。

調査地点は稲村城跡主郭部の南側の標高約48mから36mの丘陵上に位置し(図版1)、3段からなる平坦面を上段からA地点、中段をB地点、下段をC地点とし、200㎡を調査対象とした。調査地は、以前、花卉栽培等で利用されていたが、その後、利用されることはなく、竹や樹木が繁茂しており、調査に支障をきたすことから、調査開始前に、草刈・伐採作業を行った。

調査の方法は、各地点とも直交する2本の幅2mのトレンチを設定した。丘陵上のため重機の進入が困難なことから、全て人力による表土除去及び精査により、遺構の有無・地形造成による整地面の有無の確認調査を行なった。また、各トレンチにおいてサブトレンチを適宜設定し、土層の確認・遺構の性格把握のための掘削を行った。樹木の根が密なことや土質の粘性が強いことから人力掘削に大きな労力を強いられた。

なお、調査の目的が稲村城跡の範囲確認・保存のため、検出遺構については、その時代及び性格の把握のみに留め、極力、現状保存した。遺構の性格(竪穴建物跡=SI・溝=SD・土坑=SK・小穴=P・その他= SX)ごとに採番し、遺物はトレンチ・遺構ごとに取り上げた。

11月26日、器材搬入・テント設営後、まずC地点トレンチ5・6の調査から開始し、表土除去後、両トレンチの表土下約0.3mで縄文土器を多量に含む暗灰色シルト層と無遺物の黒色シルト層を検出した。この層の性格を把握するため、トレンチ6の南北両壁にサブトレンチを設け、土層の堆積状況を確認した結果、基盤層が西から東へ傾斜しており、暗灰色シルト層は再堆積によるもの、黒色シルト層は自然堆積によるものであることを確認した。

11月28日、B地点トレンチ3及び4の調査に着手した。表土除去後、サブトレンチによる深堀を効果的に行い、基盤層が東から西へ傾斜していることが判明した。トレンチ3東側表土下約0.2mで平坦な岩盤(基盤層)を、西側では盛土層を検出し、この平坦面が造成によるものであることが判明する一方で、この盛土層の下に古墳時代竪穴住居跡を検出した。

トレンチ4南側では、表土直下で多くの土師器が出土したため、慎重に精査を行なった結果、古墳時代竪穴住居跡の平面プランを検出した。北側では、盛土層を掘り込む形で、現在の平坦面に並行するように溝2条を検出した。このため、トレンチ3西側2箇所トレンチを拡張し、溝の範囲を調査したところ、溝が現在の平坦面に並行して延びていることが判明した。

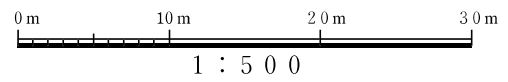
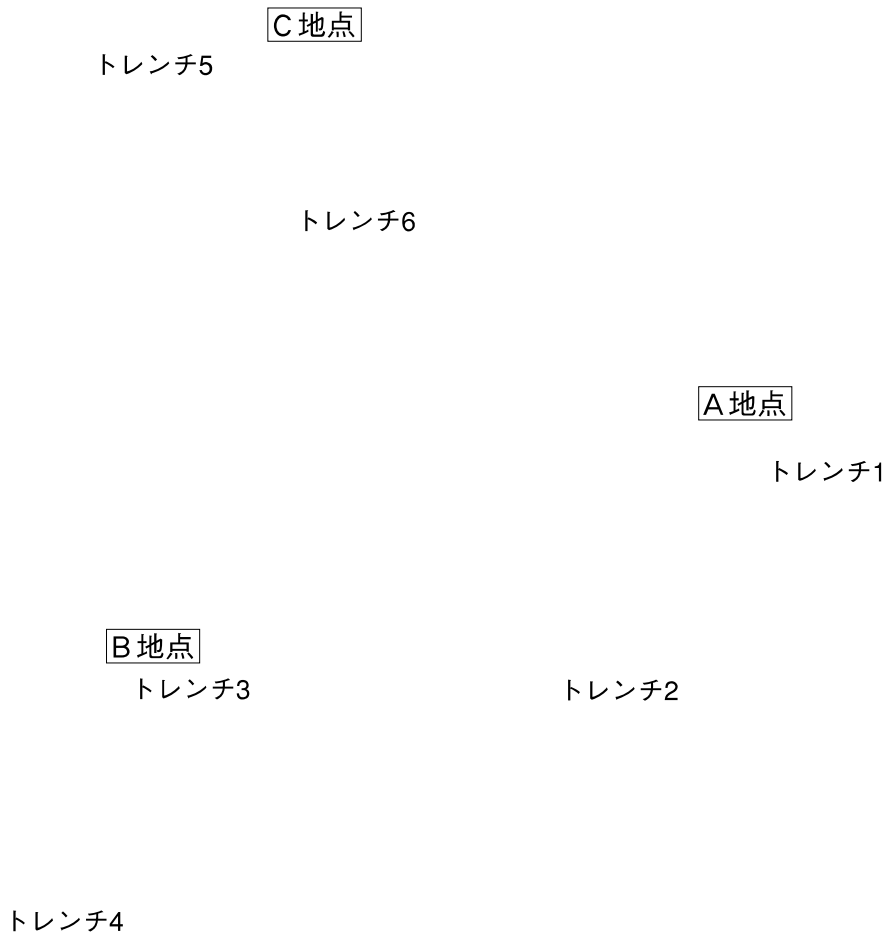
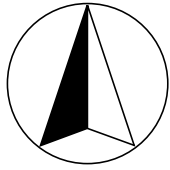
12月4日、A地点トレンチ1及び2の調査に着手した。原地形が南北方向に傾斜した泥岩層と砂層の互層の傾斜地であり、その傾斜地を削平し、平坦面を造り出していることを確認した。

12月18日、全トレンチの実測、図面作成及び写真撮影終了。

12月19日、地元及び報道記者現地説明会。説明会終了後、埋め戻し開始。

12月21日、埋め戻し完了。器材・テントを撤収し、調査を終了した。

(青木 俊久)



第4図 トレンチ配置図 (1/500)

2. 調査区の概要

(1) A地点（トレンチ1・2）

トレンチ1は北東―南西方向に幅2m、長さ30mで設定したトレンチである。

トレンチ2は北西―南東方向に幅2m、長さ13mで設定したトレンチである。

概要

表土下約0.2～0.3mの深さで黄白色粘土ブロック混じりの黒褐色シルト及び砂層が堆積している。トレンチ2においてサブトレンチによる土層断面により、厚さ約10～15cmの泥岩及び粘土層と砂層の互層が南北方向に傾斜して堆積しており、その互層を平坦に切るように表土が堆積している。この互層は丘陵を形成する地層であり、丘陵形成時に傾斜した地形を後の時代に削平し、平坦面を造出していることが明らかになった。表土下の黄白色粘土ブロック混じりの黒褐色シルト層上より縄文土器・弥生土器・古墳時代土師器片が、表土下層より近世陶磁器が出土していることから、古墳時代～近世の間に造成工事が行なわれたと思われる。

遺構（第5図）

S X-1

表土下約0.3mの深さでトレンチ1に平行する7条の溝状遺構が検出された。いずれの溝状遺構も幅0.2～0.3mで深さは0.1m程度と浅く、覆土はしまりのある黒褐色土の単層である。溝間の間隔は約0.5m～1.0mである。出土遺物はない。近世の耕作による畝溝と考えられる。

遺物

表土下の黄白色粘土ブロック混じりの黒褐色シルト層上より縄文土器・弥生土器・古墳時代土師器、表土下層より陶磁器が出土している。いずれも小片で図示できるものはなかった。

(2) B地点（トレンチ3・4）

トレンチ3は北東―南西方向に幅2m、長さ26mで設定したトレンチである。

トレンチ4は北西―南東方向に幅2m、長さ12mで設定したトレンチである。

概要

B地点南東側は、トレンチ3東側で表土下約0.2mの深さで平坦な泥岩盤（基盤層）が露呈し、トレンチ4南側は表土下で赤褐色シルトが堆積した平坦面となっている。この平坦な岩盤はこの平坦面を造出した際に原地形を削平したためだと考えられる。

トレンチ4の南側において古墳時代中期の竪穴住居跡が検出され、古墳時代からこの地形がある程度平坦であったと思われる。

一方、調査地点中央より北西方向にかけては基盤層（泥岩層と砂層の互層）が同方向に傾斜し落ち込んでおり、その上に、礫混じり黒褐色シルトが約0.4m堆積し、平坦面が形成されている。トレンチ3中央の礫混じり黒褐色シルト層下から古墳時代中期の竪穴住居跡が検出されて

いることから、古墳時代以降に盛土され、南東側からの平坦面が形成されたことがわかった。また、この盛土を掘り込む形で東西に延びる溝を検出した。年代を決定付ける出土遺物はないが、中世から近世のものと考えられる。土坑・ピットについては近世の時期と思われる。

遺構（第6図）

S I-1

一辺約4.0mの方形平面プラン。出土遺物から古墳時代中期竪穴住居跡と思われる。覆土は黒褐色シルト及び暗灰褐色シルト層であり、炭・焼土を多く含んでいる。床面までの深さは約0.3mである。出土遺物：土師器

S I-2

トレンチ3中央部表土下約0.7mの深さで、一辺約3.5mの平面プランを検出。全体の大きさ不明。炉跡と思われる円形のピットとその周辺に焼土・炭を検出した。出土遺物から古墳時代中期竪穴住居跡と思われる。出土遺物：土師器

S D-1

トレンチ4北側～トレンチ3西側にかけて延びる溝。幅1.5m、深さ0.3m。覆土は黒色シルトの単層。斜面に沿って延びているものと思われる。出土遺物は縄文土器・土師器があるが、小片や磨耗しているものがほとんどである。

S D-2

トレンチ4北側～トレンチ3西側にかけて延びる溝。幅0.5m、深さ0.3m。覆土は黒色シルトの単層。S D-1同様に斜面に沿って延びているものと思われる。出土遺物なし。

S D-3

S I-1と平行するように東西にわたって検出された。幅約0.4m、深さは0.1m。出土遺物ないが、覆土はS I-1と同じ黒褐色シルト層であり同時期のものと考えられるが、S I-1との関連は明らかではない。

S K1・2・3・4

直径約0.7mの円形もしくは楕円形土坑。深さは約0.15m。S K3・S K4の底形は皿状。覆土は明灰色シルト層単層。出土遺物なし。

ピット（P6・7・8・9・10）

P6・7は直径約0.2m。深さ0.05m。覆土は灰色シルト層単層。出土遺物なし。

P8は直径約0.7m。0.15mの深さで中段があり、さらに直径約0.4m、深さ約0.15mで掘り込まれている。出土遺物なし。

P9は直径約直径約0.4m。深さ0.2m。覆土は灰色シルト層単層。出土遺物なし。

P10は直径約直径約0.7m。深さ0.15m。覆土は灰色シルト層単層。出土遺物なし。

遺物（図版7）

S I-1、S I-2より土師器が出土している。各トレンチより縄文土器・土師器・陶磁器が

出土している。トレンチ4南側では弥生時代後半の弥生土器（壺肩部等）も少量出土している他、奈良時代と思われる須恵器杯口縁部1点が出土している。いずれも小片であり、図示できるものはなかった。

（3）C地点（トレンチ5・6）

トレンチ5は北－南方向に幅2m、長さ17mで設定したトレンチである。

トレンチ6は東－西方向に幅2m、長さ8mで設定したトレンチである。

概要

トレンチ5北端及び南端、トレンチ6東端において表土下約20cmで基盤層である黄褐色シルトを検出した。この基盤層は東から西方向に傾斜しており、傾斜にそって黒褐色シルト・暗灰色シルトが堆積している。トレンチ6及びトレンチ5南側では、基盤層の上に厚い無遺物の黒色シルトが同様に傾斜して堆積しており、かつては小谷が入り込んでいたことが窺える。

暗灰色シルト層は多量の縄文土器の他、弥生土器も混在して出土しているが、それらは脆弱なもの、磨耗しているものも多いこと、同一個体が少ないこと、出土遺物の時期・時代が混在していること、大小の砂礫も含んでいることから、二次堆積によるものと思われる。当城の造作に伴い、傾斜地・小谷を平地造成するために、盛土された可能性が高いと考えられる。

遺構（第7図） ピット（P2・3・4・5）出土遺物なし。近世のものと思われる。

遺物（第8図）

C地点からは2層（暗灰色シルト層）より多量の縄文土器が出土しているが、その多くは堆積経緯・環境から器面の摩滅・劣化が見られ、接合・復元が困難であったため、紋様・器形の判別が明確なものの拓本・図化を行なった。

1～15は縄文土器である。縄文時代中期のものが大半であるが、後期のものも若干見られる。16は弥生土器である。

石器は黒曜石を石材とする剥片石器及び剥片、凝灰岩及び砂岩主体の礫石器が出土している。

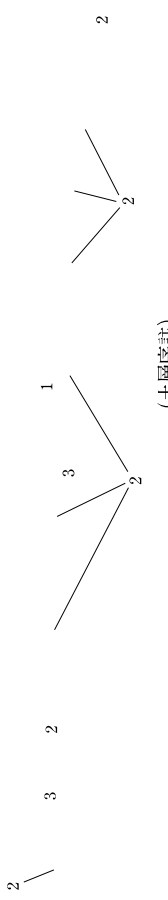
17は磨石、18は石錐、19は石鏃である。

（青木 俊久）

（第3表） 石器属性表

No	出土位置	種別	石材	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
17	トレンチ5	磨石	凝灰岩	7.5	4.4	4.6	177.0	
18	トレンチ5	石錐	頁岩	4.3	2.9	0.7	6.5	
19	トレンチ5	凹型鏃	黒曜石	1.7	1.6	0.3	1.1	

A'(48.0m)



(土層序註)

- 1 表土 下層に近世陶磁器含む ややしまりがある。
- 2 黒褐色シルト 黒褐色シルト混じる。縄文土器・土師器混じる。
- 3 黄白色粘土及び泥岩 砂層 固くしまる。 黄白色粘土及び泥岩

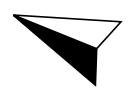
トレンチ2

A'

サブトレンチ

SX-1

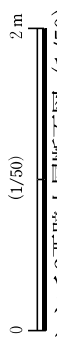
トレンチ1



岩盤 (泥岩)

A

1



トレンチ2西壁土層断面図 (1/50)

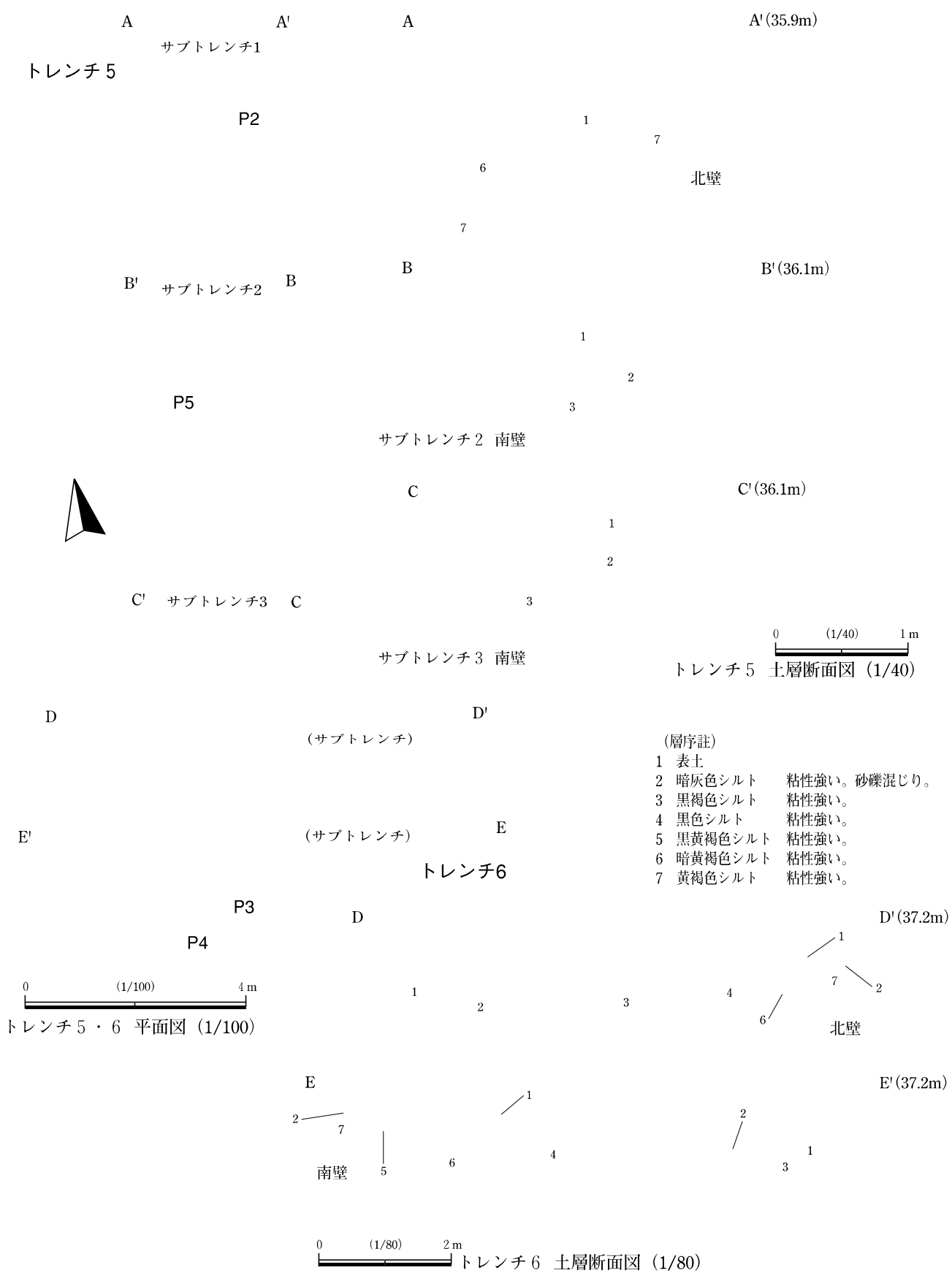


トレンチ1・2平面図 (1/120)

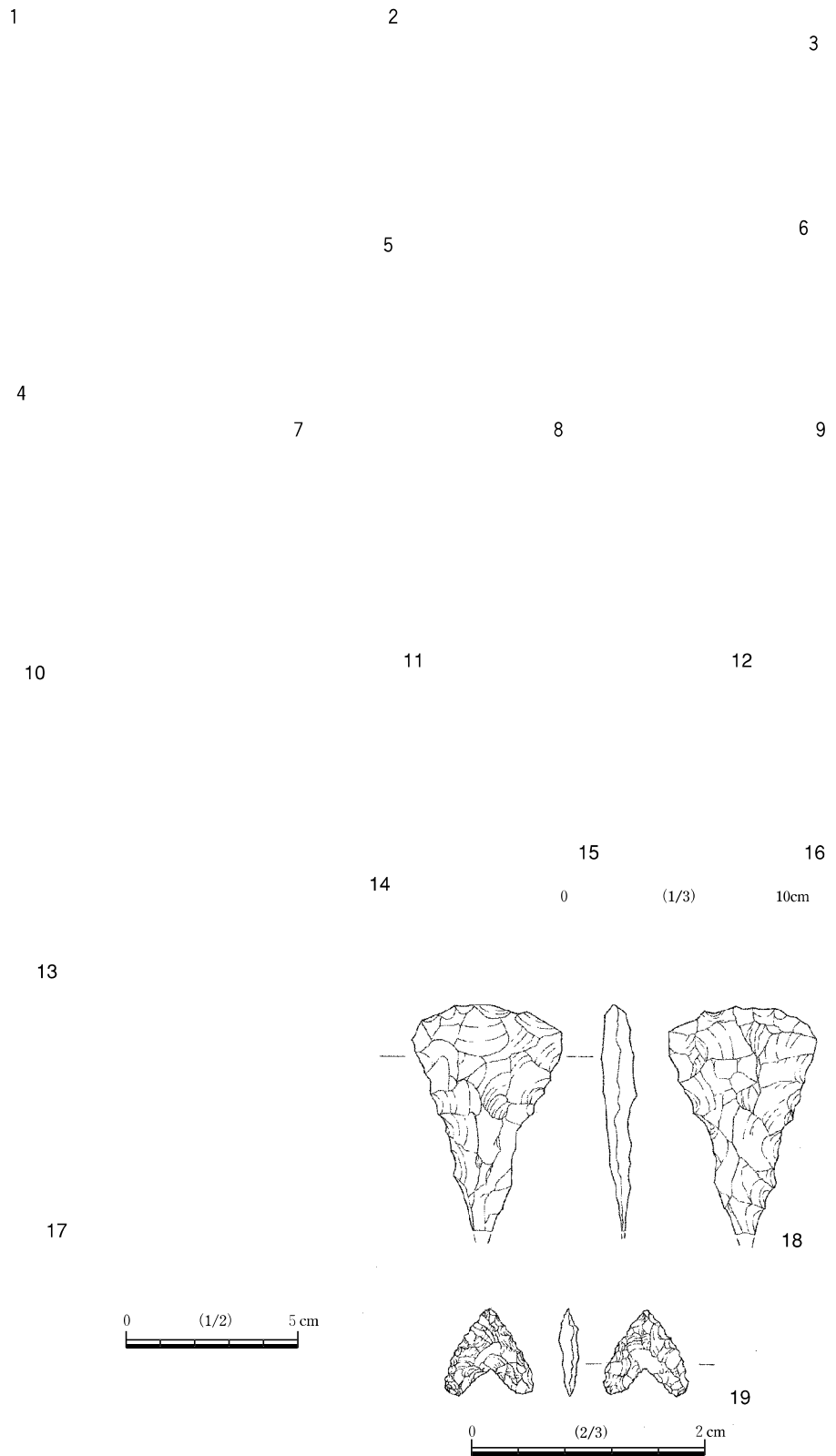
第5図 A地点 トレンチ平面図・土層断面図



第6図 B地点トレンチ平面図及び土層断面図



第7図 C地点 トレンチ平面図・土層断面図



第8図 C地点出土遺物

Ⅳ まとめ

今回の2ヵ年度にわたる調査は、稲村城跡の今後の保存・活用を図るためのものであり、測量調査と発掘調査に加えて、これまであまり調査が行われていなかった周辺地域における文献資料や中世石造文化財・仏像彫刻などについての関連資料調査も行っている。

これらの調査結果については、すでにみてきたように、各項目ごとに詳細な報告がなされている。ここでは、これまでの稲村城跡に関わる研究成果を踏まえながら、各調査結果からみた稲村城跡の様相について、若干の私見を加えてまとめとしたい。

1. 発掘調査からみた稲村城跡

発掘調査にあたっては、その目的や調査箇所などについて調査検討委員会において議論され、これまで確認出来ていない居館跡やそれに付随する建物群など、日常的な生活の場所の検出の必要性が第一に指摘された。それを受けて、発掘調査を行ったA・B・C3地点のほかにも主郭部周辺の丘陵下平坦地に8カ所程発掘調査候補地が選定された。しかし、結果としてこれらの場所については発掘調査することが出来なかった。このため、主郭部から続く中郭部の丘陵上の平坦部を中心とした区域（A・B・C地点）での発掘調査となったものである。

このような経緯をたどった発掘調査ではあったが、結果からみると、縄文時代や古墳時代の遺跡が確認されるなどの予期せぬ成果を含め、大きな成果が得られたものと考えられる。

なかでも、A・B・C3地点のうち、「西の水往来」で主郭部で切断されているC地点の平坦面（昭和58年度の調査報告書⁽¹⁾で中郭部Ⅳ郭④の平坦面、以下、番号で示した個所は前記報告書による）が、西側から入り込む谷の谷頭を短期間のうちに埋めて造成されている事が判明した点は重要である。

このC地点の平坦面④のレベルは、地形測量からみると、「西の水往来」を挟んで北側の主郭部の裾部に造り出されたと考えられる平坦面とほぼ同じであり、両者を地形図（500分の1）の等高線の流れからみると、同一の平坦面として造作された可能性が高いと判断される。この点を踏まえて、C地点の場所をみると、この地域は主郭の城山から西側へと伸びる小丘陵の(5)・(6)と同様に、同じく西側へ伸びる小丘陵の尾根（今回新たに尾根(7)とする）の基部にあたる個所であることがわかる。昭和58年度の調査の際は、今回C地点としたこの平坦面④とその西側に続く一段下の平坦面⑤の存在は把握していたものの、「西の水往来」の存在によって、うかつにもこの小丘陵の尾根(7)の存在についてはあまり意識になかった。

今回の調査において、C地点において谷頭と考えられる小谷が確認されたことを受けて、この小丘陵の尾根(7)をみると、C地点の平坦面④とその先一段下の平坦面⑤から先端部へと段々状に三段平坦面が造り出されている。さらに、その先端部の端をみると、東西に伸びる小丘陵の尾根(2)(3)(5)(6)と同様にほぼ垂直に削り落とされており、その削り落しは「西の水往来」によって切断されている北側の部分へも続き、取り付きを難しくしていることが良くわかる。そして、その南側についてみると、谷が西側から入り込んでいる。この谷については、開口部付

近に現在家が建っており、その先の奥方向をみると造作されたと考えられる平坦面⑤が存在し、地表面からの観察では谷がどこまで入り込んでいるのか不明である。しかし、家の立地面と丘陵先端上面との比高差が5m程あること。そして、C地点で谷頭と考えられる小谷が検出されたことと合わせて考えると、この南側の谷がC地点まで入り込んでいたことは間違いないだろう。

以上のような発掘調査と測量調査の結果からみると、C地点の平坦面④は、東側の主郭部と中郭部の接する辺りから西側へ伸びる小丘陵の尾根(7)の付け根付近を削平し、さらに、南側の谷を東側中郭部の丘陵上のA・B地点側(中郭部Ⅳ部①②の平坦面)の土砂で埋めて、造り出していると考えられる。そして、このような土木工事をみると、それは城普請によるものと捉えた方が自然である。この点に関しては、昭和58年度の調査で判明しているように、稲村城跡の場合、主郭部の造作において、狭い山頂部を削り出しながら、その一方で盛土を行ない、広く主郭の平坦部を造り出すという大規模な土木工事をこなしていることが参考となる。このような観点からすると、恐らく、「西の水往来」(「東の水往来」も含め)は築城後(廃城後か)のものであり、このC地点の平坦面④は、主郭部側と一体となった平坦面(曲輪)として造作されていたと判断される。

また、これに加えて、東側の丘陵上のA地点(中郭部Ⅳ部①の平坦面)からC地点にかけての急斜面の中段には、幅2m前後の帯曲輪状の平坦面が巡っている。北側の主郭部側は「西の水往来」のため切断されており不明であるが、この帯曲輪状の平坦面がC地点の平坦面④の造作に伴って造り出されたことは容易に理解される。

今回の発掘調査によって、C地点の平坦面④が城普請で造作されたと把握出来た点は大きな収穫であった。その点からみると、A地点(中郭部Ⅳ部①)及びB地点(同②)の造作も城普請によるものと判断できるだろう。

ただ、今回の発掘調査においても城に関わる出土遺物は検出されず、稲村城の存続時期を遺物から確認することが出来なかった点は残念であった。

しかし、その一方、今回の調査区域で城に直接関わる出土遺物や遺構が検出されなかった点は、この中郭部の平坦部(曲輪)が、ほとんど使用される間もなかったか、或いは、日常生活の場ではなかったことを示しているのではないかと理解される。そのことからすると、逆に、この城の構造や使用期間を考える上でそれなりの意味をもつものである。

なお、遺構は検出されなかったが、A・B両地点で縄文土器の出土をみたことは、中郭部Ⅳ部の①②平坦面がすでにその時代から、ある程度開発されて平坦な面となっていたことを想起させる。そして、その後、弥生時代末から古墳時代初めの頃、この地を人々が使用し始め、古墳時代中期になると、B地点の平坦部②に竪穴住居跡が作られるようになったこと、さらに、奈良時代頃にも人々の痕跡が認められることなどが判明したことは、別の意味で稲村城の立地するこの場所を考える上で有意義なことである。

この点に関してみると、古墳時代後期には、この城を形成する主郭部や中郭部の丘陵斜面部

に横穴墓が多数造営されている⁽²⁾。さらに、北側の低地を流れる滝川の流域をみると、下流左岸の砂丘帯上には、弥生時代や古墳時代、奈良・平安時代のみならず、鎌倉時代や室町時代～戦国時代に至るまでの遺構・遺物が検出されている萱野遺跡⁽³⁾をはじめ安房国分寺跡等々、館山平野のなかでも弥生時代以降の主要な遺跡が所在している。また、滝川を挟んだ稲村城跡の対岸の腰越地区には土師器の散布地が知られている。今回この腰越遺跡の表面採集（観察）を試みた結果、僅かに一片であるが、古墳時代中期（和泉期）とおぼしき断面くの字状を呈す土師器甕の口縁部小破片を認めた。

また、稲村城跡の南へと続く丘陵上の尾根道を行くと白浜城跡へ至ることが知られている⁽⁴⁾。白浜城跡の丘陵下の平地には、弥生時代から奈良・平安時代の遺跡も多く、なかでも古墳時代の祭祀遺跡である小滝涼源寺遺跡は著名である。

このように、周辺地域も含めた遺跡の分布状況を概観すると、この稲村城跡の立地する場所は中世のみならず古代からの交通の要所であり、また古墳時代後期には、墓域として神聖な場所でもあったのではないかと想定される。

2. 測量調査からみた稲村城跡

測量調査を行った主郭部とその周辺地域については、昭和58年度の県教育委員会による調査成果をもとに、研究が進められ、すでに縄張図が作成・発表されている⁽⁵⁾。しかし、昭和58年度の調査では、城跡の全容を把握するために縮尺1,000分の1で地形図を作成しているため、一部遺構の詳細な把握が不十分となった点は否めなかった。

今回の測量調査は、今後の保存・活用に資するためのものであり、これまでの調査成果や現地確認を踏まえた上で、縮尺500分の1の地形図を作成している。それをみると、主郭部における遺構の存在が良くわかる。それをもとにした現地調査の結果は、1章2節に記されているとおりである。専ら地表面での観察であるとはいえ、本城跡の理解と保存・活用を図る上で、主郭部の構造と遺構の様子を十分示すことが出来たものと思われる。

それらのうちでも、昭和58年度の調査では現地確認が出来ていなかった主郭とその西側の丘陵下の「西門」や「要害」の地とを結ぶ、往時の登城路の一つと考えられる道が確認できたことは、大きな収穫であった。

主郭部丘陵下の平坦地に存在が想定される居館や、生活居住域から主郭への登城路については、他にも「要害」の南側から小丘陵の尾根⑤を上・下するやや急な道も可能性はあるが、これまでは登城路というと、「東の水往来」と「西の水往来」に目が向いていたようである。

「東の水往来」と「西の水往来」と呼ばれる丘陵を掘削した道は、これまで主郭部と中郭部とを分ける「堀切り」であり、また登城路ともみられている。しかし、主郭部南端の丘陵上の掘切り部は、掘切りの役割を果たしておらず、南側の中郭部とは障害もなく、ほぼ同レベルに近く、中郭部の丘陵上からは、敵は主郭部へ容易に取付くことが出来る。また、この「水往来」を登って主郭部南端の丘陵頂部に至れば、同様に取り付きはたやすい。堀切りなどの防御遺構は現状では認められておらず、今一つこの「水往来」の位置付けについては不分明な点があっ

た。

今回の発掘調査の結果からみて、「東・西の水往来」は稲村城の築城に伴わない可能性が高いと判断されることからすると、主郭への登城路の問題は、その確認を含めて、稲村城の構造を考える上からも重要である。

中郭部と外郭部については、これまで稲村城跡が1500年前後頃の城という前提を有してきたためか、中世城郭研究者のなかには認知度が低かった面も否めない⁽⁶⁾。しかし、今回の発掘調査結果から、時期を確認出来る出土遺物は無いものの、中郭部においても城郭に関わる造作が施されていることが明らかになったことは重要な成果であった。さらに、中郭部の他の地域や外郭部においても、現地調査によって、所々に城郭遺構と見なせる整形が施されていることが再認識出来たことは有意義なことである。しかしながら、その反面、中郭部と外郭部では自然地形を多く残していることから、1章3節では、次のような鋭い指摘がなされている。すなわち、本稲村城跡におけるそのような状況は、この城郭が完成された城郭ではなく、ある時点で造作が途絶したからではないのか、そしてそれは天文の内乱(1533～1534年)によるのではないかとする指摘である。

このような観点からすると、今回の発掘調査地点にみられる造作された平坦面の様子や、主郭部に比して、中郭部、外郭部の中途半端ともいえる様相が理解できるのではないだろうか。

稲村城跡の場合、現在までのところ、その存続時期が確認出来る出土遺物がなく、また、信頼出来る文献資料についても、この城について明記したものは無い。このため、その年代などについては、主として系図類や軍記物などの史料をもとに考えられてきているが、近年の研究の進展に伴い、少なくとも前期里見氏二代義通・三代義豊の居城との位置づけが定着しており、さらに、「鎌倉大草子」にみえる初代義実の「十村の城」(稲村の城)とする見解も強く打ち出されている⁽⁷⁾。

このような稲村城の時代的な位置づけを踏まえて、今回の調査結果を考えると、そこにはこの稲村の地に前期里見氏当主の城が築かれてから、三代義豊の時代に至るまでの過程が反映されていると見る事が出来るのではないだろうか。特に、義豊の時代には軍事的に見ると東京湾の主導権をめぐって、後北条氏と鋭く対決するようになってきていることが知られている。恐らく、そのような状況に押されながら、天文の内乱にみられるように、義豊が己れのもとに権力を集中させていく過程で城の整備・拡大が行なわれていったのではないだろうか。

昭和58年の調査において、本城跡は「城堅固の城」というよりもむしろ「所堅固の城」として把握したところであった。時間的な制約もあって十分な調査には至っていないが、今後さらに究明が求められるところである。

3. 関連資料調査からみた稲村城跡

関連資料調査については、その必要性を感じつつもこれまでは十分出来なかったことである。その成果については、すでに詳細に報告されており、改めて述べるまでもないが、ここでは中世石造物と仏像彫刻の分布調査の成果についてふれておきたい。

今回の稲村城跡周辺地域における中世石造物・仏像彫刻の分布調査からみると、稲村城跡を前期里見氏当主（主として二代義通・三代義豊）の居城としてそこに置いた場合、その時代を前後して明らかに各々分布状況に差異があることが明らかになっている。石造物にみれば、14～15世紀代と16世紀以降の石造物の分布状況が示す差異、仏像彫刻でみれば、鎌倉～室町期と室町末期頃のもの分布の差異である。これらの差異は、いずれも稲村城の時代を境いに変化しているとみることが出来るだろう。このことは、期せずして両報告者が述べているように、この地域に前期里見氏が進出して、稲村城を築城する前と、それ以降の地域の様相を反映しているものと判断される。その意味では、稲村城に関わる直接的な資料の少ないなか、状況証拠の一つとはいえ、これら地域に残る石造物や仏像彫刻などは有力な物的資料となるものである。その点からみても、今回の調査は文献資料や伝承調査ともども、大いに意義のあることであった。

4. 結びにかえて

以上、主な調査成果をとりまとめてきたが、今回の調査は、昭和58年度に実施された県教育委員会による重要遺跡確認調査以来、ほぼ四半世紀ぶりの調査であった。

その間、稲村城跡をめぐるのは、道路建設問題や保存運動を経る中で、多くの市民や研究者による里見氏に関わる調査・研究が著しく進展し、この城跡の重要性が一層増してきた⁽⁸⁾。

館山市では、その点を踏まえ、今後の保存・活用に資するために、今回の調査を実施したものである。十二分とは言えないまでも、各々において多大な成果をあげたことは間違いない。只、その中で、居館跡をはじめとする生活居住域の確認が出来なかった点、中郭部・外郭部の全容が十分に明確化し得ていない点など今後に残した点も多々ある。それらのうち、特に居館や居住域については、本城跡の保存・活用を図っていく上で、出来るだけ早く発掘調査を行って、その所在を明らかにしておくことが望まれる。

最後になりましたが、今回の調査は土地所有者の皆様をはじめ地元稲区の皆様方の多大な御協力によって実施できたものであり、心より御礼申し上げます。個人的な事となりますが、四半世紀程前の本城跡の調査に従事した者として、その時、地元の皆様方の暖かい御協力を得て、共に発掘調査に当たったことを思い起こします。ありがとうございました。

稲村城跡が、土地所有者の皆様をはじめ地元の稲区の皆様方と、多くの市民の皆様方の御協力によって、館山市だけではなくわが国の貴重な文化財として、末永く保存・活用されていくことを切に願う次第です。

(天野 努)

【註】

(1) 千葉県教育委員会 1983『千葉県中近世城郭研究調査報告書 第4集 - 稲村城跡・臼井城跡発掘調査報告 - 』

(2) 井上哲郎 1996「稲村城跡の横穴墓及び「やぐら」」『千葉城郭研究』4

なお、(註)1文献では、これらの横穴墓を「やぐら」として扱った。その後の調査研究により、その

多くは安房地域に特徴的な「横穴墓」と認識されるに至っている。「横穴墓」を再利用した「やぐら」について、検討の余地はあると思われるが、ここでは前記文献によっておく。

(3) (財) 千葉県文化財センター（現在の(財) 千葉県教育振興財団）によって、2002年に発掘調査されている。現在、整理作業中であり、担当の半澤幹雄氏より御教示を受けた。

(4) 里見氏稲村城跡を保存する会事務局 1996「第1回里見の道ウォーキング報告～稲村城から白浜城への歴史への道～」『里見氏稲村城跡をみつめて』

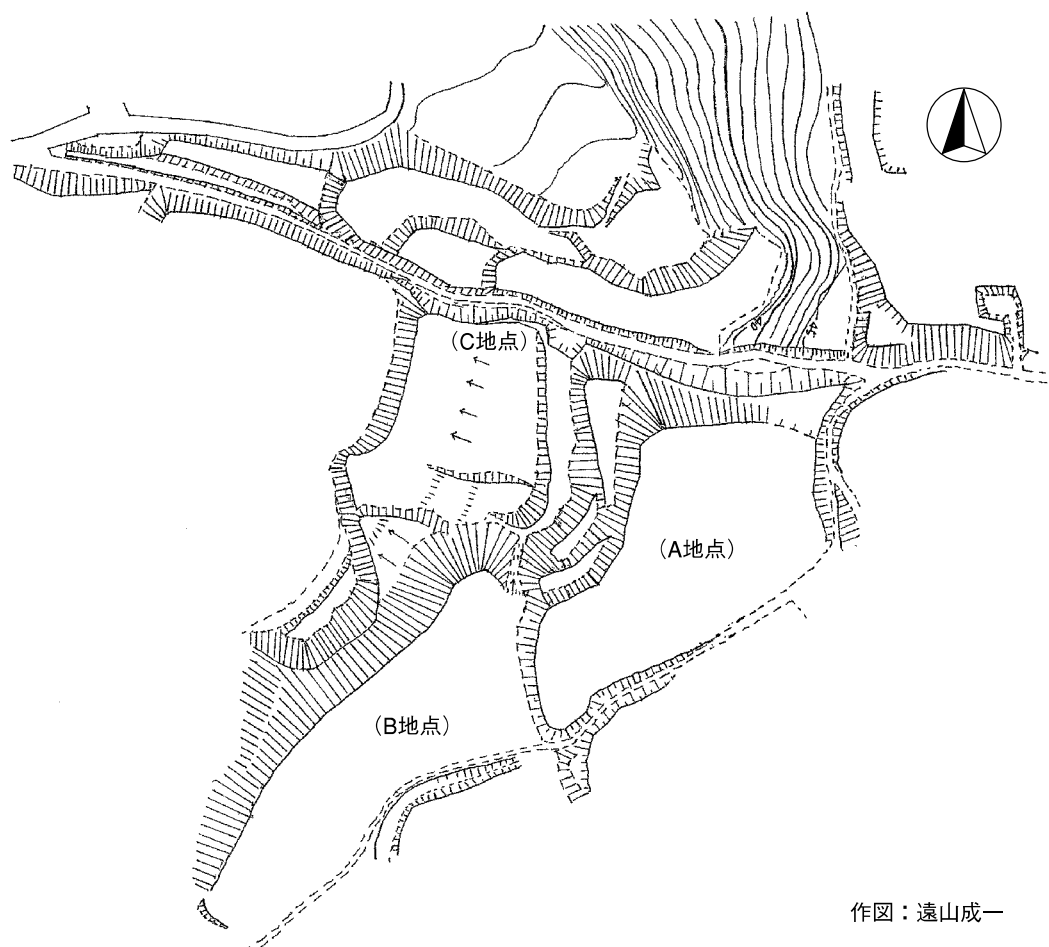
稲村城跡の保存運動に積極的に取り組んでこられている「里見氏稲村城跡を保存する会」の世話人代表、愛沢伸雄氏から御教示を受けた。実際に、多くの方々と踏査され、徒歩で6時間ほどの行程という。

(5) 遠山成一 1996「稲村城の構造」『千葉城郭研究』4

(6) 柴田龍司 1998「稲村城跡」『千葉県の歴史 資料編中世1（考古編）』

(7) 滝川恒昭 1996「房総里見氏の歴史における稲村城」『千葉城郭研究』4ほか

(8) 「里見氏稲村城跡を保存する会」発行の『里見氏稲村城跡をみつめて』第1～4集が、現在に至る進展を良く示している。なお、稲村城跡を含め里見氏について、これまでの研究成果を総括的にまとめたものを取り上げるならば、館山市立博物館 2000『さとみ物語』が便利である。



作図：遠山成一

第9図 調査地縄張図



稲村城跡全景 航空写真（平成18年）

図版2



トレンチ1
完掘状況（東より）



トレンチ2
完掘状況（北より）



トレンチ2
西壁土層断面



トレンチ2
南側岩盤検出状況



トレンチ3
完掘状況（東より）



トレンチ3
SD-1検出状況（東より）

図版4



トレンチ3拡張部
SD-1検出状況(東より)



トレンチ3
北壁土層断面



トレンチ4
完掘状況(北より)



トレンチ4
北側西壁土層断面



トレンチ4
SI-1検出状況（北より）



トレンチ5
完掘状況（南より）

図版6



トレンチ6
完掘状況（西より）



トレンチ6
南壁土層断面



調査作業風景



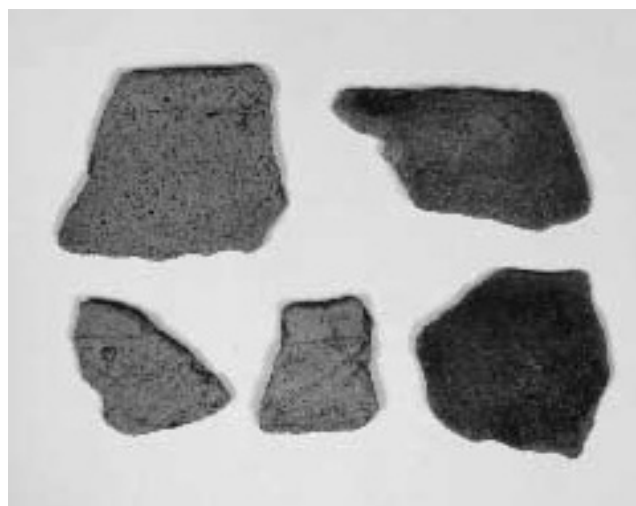
縄文土器 (1)



出土石器



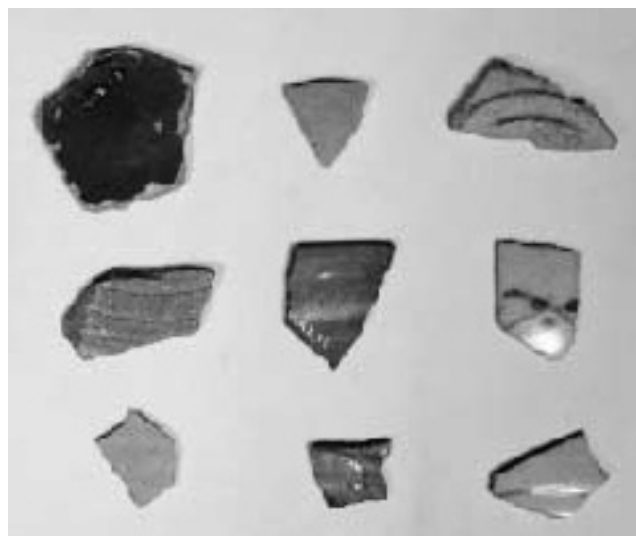
縄文土器 (2)



弥生土器



古墳時代土師器



近世陶磁器

図版8

中世石造文化財



1. 延命寺開山塔



2. 天文銘石仏



4. 福生寺五輪塔



3. 光堂宝篋印塔群





報告書抄録

ふりがな	たてやましいなむらじょうせきちょうさほうこくしょ							
書名	館山市稲村城跡調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	青木俊久・天野努・岡田晃司・杉江敬・滝川恒昭・遠山成一・早川正司（五十音順）							
編集機関	館山市教育委員会							
所在地	〒294 - 8601 千葉県館山市北条1145-1 TEL 0470 (22) 3698							
発行年月日	西暦 2008年（平成20年）3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °、′、″	東経 °、′、″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いなむらじょうせき 稲村城跡	たてやまし いな きふね 館山市稲字貴船98-2 ほか	12205	42	34度 59分 54秒	139度 54分 14秒	20071126 ～ 20071221	200㎡	保存目的の 学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
稲村城跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡2軒 溝状遺構1条	縄文土器・弥生土器・ 土師器・須恵器・陶磁器		丘陵上での古墳時代集 落跡		
	城館跡	中世・近世 近世	溝状遺構2条 溝状遺構1ヶ所・土坑4基 ピット9基			中郭部平坦面での整地 面を確認		
要約	<p>稲村城跡主郭部南側の中郭部の平坦面について、切土及び盛り土によって整地された面であることが確認された。縄文土器・弥生土器を含んだ土が造成に使われており、この整地作業は、一大土木工事であったと考えられ、その規模と内容から、稲村城が造営された当時の整地面である可能性が高い。</p> <p>このほか、当地域で初めて丘陵上にて古墳時代の住居跡を検出した。</p>							